

現代文訳

岩淵夜話

徳川家康説話集

全五卷

原作 大道寺友山

千七百十年頃



大坂城風景

岩淵夜話解説

大道寺友山による徳川家康説話集

構成

岩淵夜話は江戸時代中期に大道寺友山が著した徳川家康の出生から大阪夏の陣迄の間六十七からなる説話集である。写本は国立公文書館内閣文庫に幾つかあるが各説話のタイトルはなく一つ書説話となっており巻数もないものが多い。但し同文庫の糟粕集に収められた写本には巻数があり五巻からなっている。現代文訳にあたり、前記巻数に従い、更に説話毎に適当なタイトルをつけた。幼少期から三河、浜松時代（第一―二巻）、関東入国、豊臣政権大老時代（第三巻）、関ヶ原戦から江戸幕府創業（第四巻）、駿府における大御所時代（第五巻）としている。大体年代順ではあるが所々説話の時代が前後しているがこれは写本通りとした。全巻六十七の説話は家康の事跡や講話を通して武士道を後世に伝えようと云う友山の意図が良く著されている。

成立時期

岩淵夜話の成立年月は何れの写本にも記述がないが、他の落穂集や駿河土産に比して最も早い時期に成立したと推定される。というのは大道寺友山が会津に仕官して落度ありとして追放されたのが元禄十三年（1706）で、その後武州岩淵（東京都北区）に寓居した時に著わしたものが岩淵夜話と云われる。更にその後正徳四年（1714）福井藩に仕官、その三年後隠居して越叟夜話（落穂集著わしたようである。この両著には著述年月日の記載があり、夫々享保元年（1716）、享保十二年（1727）となっている。

大道寺友山

作者大道寺友山は小田原北条家の家老職を勤めた大道寺正繁の曾孫に当り、父は高田藩の松平忠輝に仕えたが幼時に失う。その後備後三次の浅野分家に養父、徳永四郎左衛門と共に仕えた事及び青年期には幕臣で、大目付を勤めた北条氏長や武田家遺臣の小幡景徳などに師事した事が代表作の落穂集の中に見える。たいへん長寿な人で代表作落穂集の奥書には八十九歳で記すとあり、九十一歳で没したと云われる。現在伝わる作品としては落穂集、同追加、武道初心集、岩淵夜話、駿河土産、越叟夜話等があり、何れの著書も歴史を知ると共に武士道を後世に伝えたと云うテーマが随所に見られる。

二千十六年七月

現代文訳者 高橋駿雄

訳者略歴

千九百四十二年生

宮崎県出身 電気通信大学卒

商社勤務 退職後近世古文書を学ぶ

ホームページ「大船庵」

岩淵夜話別集 目次

第一卷 岡崎領主時代 (p5)

- 第一話 岡崎で誕生、織田家に幽閉
- 第二話 今川家に奇遇
- 第三話 今川家で元服、岡崎へ帰還
- 第四話 今川義元の討死、大高城で孤立
- 第五話 今川家に失望
- 第六話 今川家と決別
- 第七話 織田信長と和睦
- 第八話 金の馬印
- 第九話 一宮城の家来救援
- 第十話 矢矧橋の事
- 第十一話 浅井長政の事
- 第十二話 姉川の戦
- 第十三話 金ヶ崎の撤退
- 第十四話 拔駆けの厳禁
- 第十五話 池の鯉の咄
- 第十六話 松永弾正の事
- 第十七話 信長の死と甲州経営

第二卷 浜松領主時代 (p19)

- 第十八話 北条氏政と面会
- 第十九話 甲州武士の採用
- 第二十話 秀吉と一戦、長久手の戦
- 第二一話 甲州流軍規の採用
- 第二二話 背中の腫物
- 第二三話 本多作左衛門の人柄
- 第二四話 秀吉と親交
- 第二五話 家臣の加増
- 第二六話 武田信玄の死
- 第二七話 父子の隙間風
- 第二八話 嫡子信康の自害
- 第二九話 小宮山兄弟の事
- 第三十話 長久手戦を語る
- 第三一話 小僧三ヶ条の咄

第三卷 関東入国、大老時代 (p32)

- 第三二話 金三郎と吉丸
- 第三三話 関東入国と江戸の建設
- 第三四話 浅野弾正、秀吉を諫める
- 第三五話 大久保石見守の事

- 第三六話 蒲生氏郷、曲渕を所望
第三七話 太閤秀吉他界後の体制
第三八話 石田三成の苦難を救う
第三九話 家康公暗殺計画
第四卷 関ヶ原前後 (p43)
第四十話 関東へ下向、長束を避ける
第四一話 石田反旗と小山会議
第四二話 堀尾帯刀の事
第四三話 美濃の大柿奪い取り
第四四話 関ヶ原の勝利、勝関は延引
第四五話 福島正則の事
第四六話 石田三成の生捕り
第四七話 福島家の三家老
第四八話 三河守秀康の腫物
第四九話 山内一豊の土佐拝領
第五十話 大野修理の本領安堵
第五一話 山名禅高の羽織
第五二話 駿府城常見の香の物
第五三話 大仏より真直ぐな政治
第五四話 主人の悪事を諫める事
第五卷 大御所時代 (p54)
第五五話 鷹狩りの目的
第五六話 雷を避けるには
第五七話 仏法の咄
第五八話 安倍川の水を引く
第五九話 火事を出した老婆
第六十話 駕籠は独りで担がぬ
第六一話 人材は宝の中の宝
第六二話 親子の話
第六三話 池田家の忠義の家来
第六四話 小出大隅守の事
第六五話 虚飾を叱る
第六六話 仇に恩で報いる
第六七話 指節のこぶ
岩淵夜話別集完

岩淵夜話別集第一巻

- 第一話 岡崎で誕生、織田家に幽閉
- 第二話 今川家に奇遇
- 第三話 今川家で元服、岡崎へ帰還
- 第四話 今川義元の討死、大高城で孤立
- 第五話 今川家に失望
- 第六話 今川家と決別
- 第七話 織田信長と和睦
- 第八話 金の馬印
- 第九話 一宮城の家来救援
- 第十話 矢矧橋の事
- 第十一話 浅井長政の事
- 第十二話 姉川の戦
- 第十三話 金ヶ崎の撤退
- 第十四話 拔駆けの厳禁
- 第十五話 池の鯉の咄
- 第十六話 松永弾正の事
- 第十七話 信長の死と甲州経営

第一話 徳川家康誕生と織田家に幽閉

太政大臣従一位源家康公は天文十一壬寅（1582）年、三河国岡崎城で誕生し、童名を竹千代君と云った。実母は同国刈谷城主水野右衛門太夫忠政の娘で同下野守の妹である。しかし竹千代君が二歳の時に母は離縁されて刈谷へ戻り、父広忠卿は田原城主戸田弾正の婿となった。

其頃尾張国織田弾正忠は西三河へ進出して、岡崎城を攻めようとしていたので、広忠卿は駿河国の今川義元へ加勢を頼んだ。この為、竹千代君は六歳の時駿府へ人質に送られる事になったが、これを織田家へ通じる者達が塩見坂付近で竹千代君を奪取り織田弾正方へ献上した。弾正は何を考えたか竹千代君を勢田の大宮司方へ預けた。一方実母は久松佐渡守と云う織田家に仕える侍に再嫁した。竹千代君が捕らえられて勢田の宮に居るのを聞き、弾正忠の許可を得て菓子、衣類等を折々送った。しかし面会は許されなかった。河野藤蔵と云う者が小鳥など進上し、常に話し相手として慰めたので、竹千代君は幼少の心にも満足に思い、後にこれを忘れず籐蔵を召出して親しくした。

註1 家康が生れた頃の三河国は尾張の織田家と駿府の今川家の二強国に挟まれ、城毎に織田側か今川方に分かれていた。

刈谷の水野忠政は岡崎の松平広忠と共に今川方だったが、子の下野守の代になると織田方となったため、家康の母は離縁された（落穂集）

第二話 今川家に寄寓

天文十八（1560）三月六日、竹千代君八歳の時、父広忠卿は死去した。その頃三河国安祥の城を織田弾正は攻取り、嫡子三郎五郎（大隅守信広）に居住させた。これを今川義元は駿遠参三ヶ国の軍勢で烈しく攻めたので、城を守り切れず落城の瀬戸際となった。そこで弾正方より交渉役が来て、竹千代君と三郎五郎を交換したいと申入れたところ、義元は喜んで交渉に応じ竹千代君を受取った。六歳の時不慮に敵方の手に渡って以来、足掛け四年目九歳の時迄他国に住んだが何の支障もなく成長し、竹千代君は再び岡崎に戻った。譜代の家来達は云うまでのなく、領内の村々の町人や百姓迄も餅や酒を用意してこれを祝った。

今川義元は、竹千代は未だ幼少であるから諸事全般を此方より指図すると云う。岡崎の家老達は余り乗り気では無かったが、今度竹千代君が尾張より帰国できた事は偏に義元の力であり、どの様にでも頼む以外なかった。これに依り竹千代君は駿府へ移るが石川伯耆、天野三郎兵衛、其外譜代の人々少々が詰め、其外の家来達は岡崎に残ったので、駿府での暮しは簡素なものだった。岡崎の城の本丸には駿河より城代が常駐し、岡崎家中では鳥居伊賀守、松平次郎右衛門、阿部大藏、石川右近等の面々が二及び三の丸に詰めて全ての執務を監督したが、義元の指示を受けなければ諸事の決済は出来なかった。これは岡崎譜代の面々にとって非常に気の詰まる事だった。

第三話 今川家で元服。岡崎に戻る

竹千代君は十三歳の時具足を初めて着け、十六歳の時駿府城中で元服し、名前を蔵人元康公と改め今川家の瀬名刑部と云う人の婿となった。これらは全て義元の世話で行われ、岡崎の譜代衆の喜びはたいへんだった。

義元の指示でその年より岡崎の城へ移り、家中や領分諸事の執務を行う様にとの事である。元康公は、幼少の時より只今に至る迄たいへんな御世話になり、更に岡崎の城へ帰参せよと有るのは一方ならぬ御恩に感謝します。御指図通り岡崎へは移りますが、私は未だ若年ですから二の丸に住みます。本丸には山田新左衛門を

其の俣置いて戴き、諸事の意見を請ける様にしたいので、新左衛門にもその事をご指示願いたいと応じた。義元はそれを聞いて大いに感心し朝比奈以下の家老達に云った事は、元康は若輩と言えない様な分別を弁えた生れ付きの人だ、壮年になった暁には一体どんな人物になるだろう。氏真のよい味方になると思い私も満足である、亡父広忠が生きていたならさぞ喜んだらうにと涙を流したという。

第四話 義元の討死、大高城で孤立

永禄三年（1560）五月、今川義元は大軍を率いて尾張へ進出し、織田信長と戦った。今川軍は勝ちに乗り大高と星崎二ヶ所の城を攻め取り、元康公は義元の依頼で大高の城に駐在していた。

ところが桶狭間と言う場所で義元の作戦違いが生じて五月十九日、不慮に討死し、大将を失った今川軍は勢力を失い全敗となった。このため今川家が持っていた城の大方は織田方に明渡す事になり、中でも大高の城は敵地の中にあり、近辺に味方の城もなかった。

家中上下の意見でも、義元が既に討死し、今川家譜代の侍大将達も皆居城を明けて退いたので、元康公一人だけが此城に駐在する事はたいへん不利です。今直ぐにでも織田軍が押寄せるのは明らかで早々撤退すべきです。織田家の大軍を引請けて一戦を試みる事は無駄な事ですと家老達も進言した。

元康公は、義元の討死も、味方が各城から撤退している事は事実だろう、しかし義元が存生の時の約定で元康が当城を預り守ると云う事は皆が知っている事である。従って早く撤退せよとの指示があつて然るべきなのに今だに指示はない。今川家の家老達もかなりうるたえている事が察せられる。しかしそれは彼等の問題である。何れにせよ明確な味方の情報も無いまま、世間の風説で当城を捨てて撤退する事は元康の本意ではないと云う。家老達の再三の説得も効果がなく、山田新左衛門方へ使を送り相談されたいと云う事になった。元康公も了解し浅井六之助、小栗大六両人を岡崎へ遣わした。

此時三河国刈谷の城主水野下野守は元康公母方の叔父であるが、此人は織田側である。通常は元康公と交流は無かったが、近日中織田方が大高城を攻めるといふ情報を得た。織田家側では、元康公は未だ若輩だが一旦の義理を守り、味方の敗軍にも構わず右も左も敵の中に只一人で踏留り、大高の城に居る事は流石に広忠の子息だけの事はある、こんな立派な武士を攻め殺すのも惜しいと

云っていた。下野守は流石に親類のよしみもあり、心配して急いで使者を送り早々撤退する様に伝えた。しかし元康公は少しも驚かず、夫までは二の丸に居住していたが、下野守方からの使いが来た後は本丸に移り、敵が襲来すれば籠城との決意だった。

そこへ岡崎に派遣した兩人が帰り、山田新左衛門方からも一時も早く撤回するのが良いと返答があったので、それではと大高の城を明けた。撤退の道筋所々で一揆が起り通行を妨げたが、本多百助が無類の射芸の名人だったので、多くの一揆を射払って無事に岡崎へ帰城した。今川家の面々は是を聞いて恥ずかしい思いをしたと後日小倉蔵助が語った。信長も委細を下野守に尋ね、元康公は義理がたく頼もしい人と思つた由。元康公十九歳の時の事である。

第五話 今川氏真に失望

大高城から岡崎に帰陣すると、元康公は今川氏真へ使者を送り、義元の弔合戦をお考えなら一時も早い方が良いでしょう、その時は元康も信長へ向かい一矢報い、義元の御恩に報いたいと度々伝えたが、氏真は全くその様子もなく、仏事や法事による弔いを行うだけであつた。忌中もやがて過ぎて元康公は、親の弔合戦など直ぐに行い時間を経過させない様にしてこそ意味がある。私の今川家に対する気持は最早是までと云つた。

第六話 今川家から独立

ある時上野の城に在城する酒井将監を呼び、元康公が密かに伝えた事は、今日の今川家の体制を考えると、氏真は親父義元の半分もない無能力な人である、併し朝比奈以下の家老や其外義元時代の十八人衆と云う歴々の者達も居る。氏真が無能でも家中が一致団結して相談し諸事を取り仕切る様にすれば、伝統ある家であるからなんとか廻るはずである。しかし家老達の考えもばらばらで相談に決するでもなく互いに様子を見て、主君や家の事を傍観している。これは将に今川家断絶の時節が来たと見るべきである。

当家は広忠公の代から私に至る迄、義元には非常に御世話になつた経緯もあり、義元討死の時以来弔合戦は延期してはいけないと度々申入れた。しかし氏真を始め家老達は同意する様子もなく、結果として私を悪者に行っているのは不届な事である。是に付いて我々の人質源三郎を捨てる事を思い立つたので、其方の人質も最後は捨てる覚悟をして貰いたいと云う事だった。

将監は答えて、主人の意向であれば親の首さへも切ると云いますから
まして倅の事はかれこれ云いませんが、義元公以来の同盟の誓に
背かれることは、大切な御家に疵が付きますと云う。

元康公は、疵の付くか付かぬかは私の気持次第であるから、先ずは
其方が人質を捨てる覚悟を決められよと云う。将監は、畏まりましたと
請けたが明らかに不本意な顔色で居城へ帰った。

元康公は急に指示を出し、自身も早速用意して馬に乗った。家中の
人々は何事で何処へ行くかも分らなかつたが、我も我もと駆けつけた。
中でも鳥居彦右衛門、大久保七郎衛門、石川内記、同伯耆、平岩七之助
など真先に進んでお供した。将監も馬を早めて帰ったが、元康公の
一隊が進んで来るのが早かつたので、とても敵わぬと思ひ居城へ帰らず
其の俣山道を通り直接駿河へと落ちて云った。

そこで将監の去った上野城は将監甥の小五郎に下され、酒井左衛門と
名を改めて家老となり将監の部下だつた同名与四郎、荒川金右衛門、
柴山小兵衛、高木九助なども今度召出されて奉公する事になつた。

第七話 織田信長と和睦

水野下野守信元の仲介で織田信長と家康公は和睦を結ぶ事になり、
尾張国小牧で両者が対面し下野守が挨拶をした。全ての約束が
決まり、互いに起請文を交わして信元も押印して焼いて灰にした。
その神水を両者が飲んだ残りを下野守も飲み儀式は終わった。

是より前に元康公は名前を改めて居たが、外部への書に家康と署名
したのは此起請文以後と云う。

註1 中世・近世に、一揆などで誓約を結ぼうとする者が、起請文
などを記し、各自署名の上、それを灰にして、神前に供えた
水にまぜ一同回し飲みして団結を誓い合つた儀式。――一味神水

第八話 金の馬印

永禄六年（1563）正月十九日家康公は岡崎の城を出発し、山中に陣を
取、同廿一日の朝牛窪の城を攻めた。本多平八郎はこの時十六歳
だつたが、牧野の中で武辺の侍である牧野宗次郎と鎗を合せた。

牧野の家来稲垣平右衛門と云う者が大局を見て牧野に異見して、
酒井左衛門尉、石川日向守を頼り降参した。牧野右馬丞は家康公の旗
下になり、幸に右馬丞は妻が無かつたので酒井左衛門尉の婿になり、
譜代衆に劣らず奉公した。此陣迄は家康公の馬印は白い四角の中に
黒で厭離穢土欣求浄土と云う文を書いたものを持たせていたが、牧野の
金の扇子の馬印が大変見事と云う事で所望して馬印とした。併し
牧野自身も其俣使用して良いと云う事で後の小田原陣（1590）迄牧野

の馬印も金の扇だった。

註1 牛窪城、後牛久保城 愛知県豊橋付近。 牧野家の居城でこの時

は今川家に属していた。 この時の戦いが家康の今川家からの

自立の最初と云われている

註2 本多平八郎 徳川四天王の一人、剛勇で有名 本多中務忠勝

第九話 一宮城の家臣救出

永禄六年三月廿日、家康公は設楽郡一宮の城を攻取り、本多百助を城番として配置して帰陣した。 しかし其年の五月今川氏真が二万の軍勢を率いて一宮城へ進軍した。 但し二万の内八千を分けて武田信虎を大将として家康公が同城救援に駆けつけた時の押さえとして待機させ、残る一万二千の軍勢で一宮城を取巻いた。

家康公はその報告を聞くと二千余りの軍勢で一宮の救援に向かう事とした。家中の武勇の者達も集り相談したが、いくら氏真の指揮が脆弱と云っても、今川家中には義元以来の武功に誉れある者が多く、其上二万の軍勢は味方の十倍である。 更に部隊を二つに分けて一つを武田信虎に預けて別軍として配備し、徳川の救援を妨げようとしているので、十分検討しても救援に赴くのは如何かと申上げた。

家康公はそれに同意せずに言った事は、皆が云う事に理はあるが、武士は本身、小身共に信と義の二つを欠いてはならない。 仮令敵城を攻め取り即時に捨てる場合は別として、既に城を抱えて味方の武士に守備を命じた以上、敵が攻寄せれば何時でも救援に行く覚悟があつて当然である。 その時敵の人数が多く体制も良いからと云つて必要な救援を手控え、守備の侍達を攻め殺させるのを見物する訳には行かぬぞ。 一般に主人に大切な事は部下の困難を救う事で古今武家の作法のひとつである。 もし今度の救援が失敗して討死を遂げたとしても、それは家康の運が尽きたと云う事である。 その覚悟を決めた以上、敵の布陣の善し悪し、人数の多少も構わぬと。 この勇断の様子を見て御前で聞いた人々は云う迄も無く、伝え聞いた末端の者迄、何と天晴れな頼もしい大将と感心して涙を流さぬ者は居なかつた。

この結果二千余り味方ではあつたが、今川家の大軍を物の数とも思わず、我こそはと先を争つて進み、信虎の八千の部隊等には目呉れず、左に見て即時に一宮城の城際に殺到した。 本多百介は城戸を開いて部隊を出して家康公を迎え、無事に城へ入った。

今川家の諸軍勢は是を見て無念、口惜しがったが後の祭りである。 この上は応援の信虎も一所に呼集め、厳しく城を攻めて、家康を始め

一人も討ち漏さぬ様にしよう、却って味方にとっては有利で怪我の功名と万全の備えでひしめいていた。しかし家康公は人馬の食事程の間休息すると本多を連れて早速帰陣した。今川家の予定とは大に狂い彼是攻める準備も調わぬ内に、味方の軍勢は早くも城を離れて、一団となって撤収した。

本多百介は、今日は私の腕の骨が続く限り働きます、それで足りずとも旗本衆には苦勞させません、と云い手勢四百余名程で信虎八千の配備を突き割り、何度も馬から下りて敵と戦った。その間に酒井左衛門尉、石川伯耆、牧野右馬丞が事前の計画通り、頃合を見て段々と部隊を進める。今川軍は是を見て追う事が出来ず、味方は完全に撤収した。

牧野右馬丞も牛窪へ帰り、一族の者を呼び集めて酒肴の席を設けて、家康公の事は以前も聞いてはいたが、今度の一宮城救援の手際は古今無類の大将のものである。この様な名将の下で奉公すれば私達も立身を遂げる事ができ、これこそ一家繁昌の基本と喜んだ。その後家康公が上洛する時、山岡道阿弥が一宮の戦いの事を語り、武士を心掛ける者は其時から今日に至る迄この咄をしております。たいへん御名譽の事ですと言えば、家康公は、夫は私の若い頃の事であり、その時は全くの若氣だったと笑った。

第十話 矢矧橋の事

ある時岡崎の城下の矢矧橋が洪水で流された。早速掛け直す様にと家康公が指示したところ、家老達の意見は、兼々私共は考えていた事です、この機会に申し上げます。此橋は世間でも稀な大橋で掛け直すには大変な費用が掛ります。又今は戦国でもありますから、城下にはこの様な大河が有るのは要害にもなります。そこで今度流れた事を幸に今後は船による渡しになさるのが良いと皆が申し上げます。

家康公はそれを聞き、そもそも此橋は代々の記録にもあり、その外舞にも平家にも語り伝えて、日本国中に知らぬ者はない。必ず異国でも知られているだろう。それを費用が掛るからと、今更橋を止めて船渡しにして、通行する人々に苦勞を掛ける事は国持大名として本意ではない。仮令どんなに費用が掛っても良いから早々掛けよ又要害に役立つとは為政者により、時にもよるべきものである。

今、家康の気持ちには全くその様な事はない。この事は皆も同じ筈である。従って要害を頼む必要はない。一刻も早く掛け直し、人々の通行に不便が無い様にせよとの事だった。

註1 源行家は三河の国まで退き、岡崎の西を流れ知多湾にそそぐ矢矧川の橋の板をはずし、防戦用の楯を並べ、待ち受けた。

(平家物語、洲俣川の戦い、1181年平重衡と戦う)

註2 この挿話は友山の他の書物になく、岩淵夜話だけである。

第十一話 浅井長政の事

織田信長公より使者があり、近江国小谷の城主、浅井備前守は私の近い親戚ではあるが、将来必ず私の敵になると確信するので、今の内に滅ぼそうと考えているのでその積りで居て戴きたい。その時に至ったら出馬をお願いするかも知れないとの事である。家康公は取合えずの返答をした後、酒井衛門尉、本多百介の兩人を使いとして派遣し、浅井を滅ぼされると聞きましたが、その後考えて見ましたが今のところ浅井の不義も無いようですし今少し様子を見られては如何でしょうか、その内に何かありませんよう。不屈きの様子が人々の目に留まれば当然ながら、小谷へ進発とさえ承れば加勢を頼まれずとも家康はお見舞いに参上しますとの口上を伝えた。

信長公の返答は、浅井の件は少し不義の様子が顕れているが、云われる様に未だ世間では目立たぬものです、ご意見感謝しますとの事だった

註1 浅井長政の正室は信長の妹、市。秀吉側室の淀や、徳川秀忠正室

江の母

第十二話 姉川の戦い

元亀元年庚午(1570)六月廿七日、近江国姉川合戦の前日、家康公は信長との談話で、戦は二の手で勝利するものと語った。その時側にいた池田紀伊守がこれを聞き、決して二の手迄使わずに済ませましようと大口を叩いた。家康公は、出来ればそう有ってほしいものですがと、その場は軽くやり過ぎした。

其後家康公は信長へ、明日の合戦では浅井か朝倉のどちらかを私に渡して下さい。切崩して御覧に入れましようと言った。信長もそれを聞いて、浅井は私の本来の敵であるので朝倉を望まれるのが良いでしょう。朝倉に当てる部隊を用意しているので、その部隊を今紹介しますので貴殿に指揮を頼み、彼等にもそれに随う様に厳しく命じますと云う。家康公は、私は元々小身ですから常に少人数の軍勢を指揮しておりますので大勢は邪魔になります。其上気心も知らぬ人々と相談するのも難しい事です。朝倉の軍勢がどんなに多くとも結構ですから、私自身の部隊だけで戦いますと云う。信長公は、尤のご意見ですが、それでは貴殿は潔よく聞こえますが、私の世間に対する立場がありません。二つか三つの部隊を使わずとも、一つ位は使つて下さいと云う。家康公が、では誰か一人戴きますと云う事になり、信長が誰を出すか

聞くと家康公は稲葉伊予守を指名した。信長は、稲葉は中でも小身者で人数も少ないが、ご希望ならと云う事で、稲葉伊予守が参加して家康公の旗本より少し後方に配置された。

其翌日廿八日、浅井備前守の軍勢三千の先頭に立つのは佐和山城の磯野丹波守秀昌と云う大剛の武者であり、前後左右を指揮して突いて掛るので信長公の先手坂井右近が先ず崩れて、しかも味方の部隊に崩れ掛る。信長軍諸部隊が慌てる所を浅井の旗本が加勢して一度にどつと攻め掛る。信長公側は三万五千の軍勢だが、三千の敵に攻め込まれ十町余り引下る。前述池田紀伊守も先手の一人だったが崩れに崩れ、家康公の先手である酒井左衛門尉の傍へ馬をよせ、何か言おうとするが左衛門尉は、昨日の大口の程もない人だ、手足まといになると自身が長刀で打ち払った。其場の近くで紀伊守が落馬したので左衛門尉に叩き落されたとその頃噂となった。

一方朝倉軍一万五千の旗本の先へ家康公の軍勢は五千で、しかも川を越えて切り掛り大いに勝利した。一の手は高天神の小笠原与八郎、二の手は酒井左衛門尉忠次、本多平八郎忠勝である。朝倉勢の中で有力な者を多数討取った。越前一国に名を馳せた真柄十郎左衛門と云う大剛も此時討たれた。向坂兄弟三人で撃殺したという。稲葉伊予守通長も旗本組の様に待機していたが、先手三組の部隊で味方軍は勝利したので、家康公の命令で浅井軍に切り掛った。そこで浅井の小谷勢が敗れたので、信長軍も踏み留まり部隊を立て直した。

結局、信長の加勢は受けずとも朝倉軍を破った事になり、これは家康公の手柄は大変なものだと九州や奥州の果迄評判となった。

第十三話 金ヶ崎の撤退

元亀元（1570）二月、信長公は越前へ進軍して手筒山と金ヶ崎の両城を攻め取った。その時近江の浅井備前守が小谷より出軍して大いに兵威を奮っていると報告があった。信長公は驚いて急に兵を引き、朝倉勢の追討ちを気にして家康公に頼んだ。

家康公は、分りました、朝倉軍が追って来たらここで押さえますよう、安心して撤収して下さいと云った。しかし信長の大軍は如何した事か総崩れの敗軍となったので一揆が所々に起り、道を掘崩し橋をはね様々の妨害を行うので信長は大変苦労して漸く朽木谷へ撤収した。家康公の部隊は小勢であったが少しも乱れず整然とした撤収だったので、道筋の一揆勢も山谷を隔てて見物するだけで手を出す事もなく。容易に

帰陣した。

註1 この時、信長は秀吉を殿として家康にその援護を頼んだ。(落穂集)

第十四話 抜駆けは厳禁

天正六年(1578)三月、武田勝頼が遠州馬伏塚へ進出してきたので、家康公も出馬した。その時大須賀五郎左衛門の甥、大須賀弥吉は旗本に属していたが先手を追い越して勝頼の旗先へ乗り掛けて手柄を立てた。この事を知ると家康公は大変立腹し、今後の見せしめの為にも成敗しようとしたところ弥吉は本多平八郎宅へ逃げ込んだ。家康公自身が平八郎宅の門前迄行き、今直ぐに出て来なければ平八郎も共に成敗すると云い、酒井左衛門の子息小五郎に追討を命じた。結局弥吉は牧野右馬丞宅で切腹した。弥吉は其時廿一歳で未だ若輩であり、特に五郎左衛門の甥でもあり、恐らく赦されるだろうと皆思っていたが、そうはならなかった。

第十五話 池の鯉

家康公が岡崎城に居住の頃、勅使などが有る時の御馳走のためと思い、長さ三尺(80センチ)程の鯉を三本生簀の中に放して置いた。ところが鈴木久三郎がその鯉の一本を取上げさせて、台所で料理する様に指示した。其上織田信長公から贈られた南都諸白一樽の口を切り飲み食べ、更に他の人々にも振舞ったので皆はてつきり鯉も酒も鈴木が拝領したものと思っていた。

暫くして家康公が生簀を見ると三本の筈の鯉が二本しか見えない。生簀の掛りの坊主を呼んで尋ねたところ、鈴木久三郎が取上させて料理にして、自身も食べて人々にも振舞ったと云う。家康公は大変腹を立て台所方にも確認したところ其通りと云う。大変機嫌悪く自身で手討にすると云い、長刀の鞘をはずさせ広縁に立つ。鈴木を呼出すと久三郎も覚悟しており、少しも怯んだ様子もなく、承知しましたと路地口より入ってきた。家康公は、鈴木の不届者め成敗するぞ、と詞を掛けると久三郎は自分の脇差を抜いて五六間も後の方へからりと投げ捨て、目を三角にして云うには、そもそも、魚鳥に人間を代えると云う事がありますか、その様な御心では天下を望む事は出来ないでしょう。私の事は好きな様にして下さいと大肌脱いで側近くに寄ってきた。家康公は長刀を捨てて、もう赦すぞと云い其の俣座敷へ入った。直ぐに久三郎を呼出し、其方の忠節が深い事に満足した。先日鷹場で鳥を取り、城の堀で網を打って魚を取った二人の足軽は非常にけしからんと思ひ、捕らえて置いたが兩人共に今赦免

するぞと伝えた。久三郎は涙を流し、私如きの気持を此様に御取上げ戴き大変有りがたい事です、実にこれは天下を治められる験と思えますと述べた。

註1 この挿話と前の十四は何れも岩淵夜話だけである

第十六話 松永弾正の事

家康公が或時信長へ呼ばれ、座敷へ通されたところ、一人の老人が着座していた。其時信長公が、家康公は多分あの老人は御存知ないでしょうと云う。家康公は、何方ですかと聞くと信長は、彼は松永弾正と云う者で、一生の間に大変な行いを三度しました。第一は將軍の光源院殿を殺し奉った事、第二には主人三好に謀反を起した事、第三には奈良の大仏殿を焼失させた事、この三つは通常の人では到底出来ない事ですと云った。

家康公は座を移り松永に向い、今日初めて御目に掛かりますが貴殿の武勇と名譽は以前から伺っておりました、今後共宜しくと丁寧な挨拶をした。さすがの弾正も信長の悪口に赤面して家康公への挨拶もきちんとできなかつた。

家康公は帰ってから家老達へ聞かせた事は、松永の悪事は世間にも例が少ない事である。但し以前に信長公が金ヶ崎から撤退する時松永はよく協力し、朽木谷では信長のために命を捨てる覚悟で信長に最後の暇乞い迄したと聞く、それが事実ならと云い咄を止めた。

註1 光源院 室町幕府十三代將軍、足利義輝（在位 1547 - 1565）

松永弾正に攻められ自害

第十七話 信長の死と甲州経営

天正十年（1582）三月十一日、甲州の武田四郎勝頼は天目山の麓、田野と云う所で自害した。その首が織田信長公に届くと信長はこれを見て、其方の父信玄は私に対し種々の悪事してきた。常々不届な事をした天罰が其方の身に下った。国を失い此様な運命になった事を最後に思い知れ、皆これを見よ、好い気味ではないかと大口を叩いた。

一方此首が家康公の前に持参され勝頼の首と聞くと、床机から下り先ずは三宝の上に据えよと指示した。その後首と対面して丁寧な態度で、偏に若氣でしたねと声を掛けた。

この時の様子を信長、家康の両大将の家中でお互いに語り合った。徳川家では家康公の礼儀の厚い態度に感銘を受け、末頼ものしいと思ったが、一方織田家の人々は全てに關して不安があると感じた。全くその通りとなり、武田勝頼が滅亡した八十日目に京都本能寺で

信長は明智日向守に討たれてしまった。これは全て奢りと油断の二つから、この結果となったものである。

武田勝頼が滅亡した時、甲斐国全体は信長配下の武将、川尻肥前守に与えられ、駿河国が家康公へ進上された。其時信長は家康公に、甲斐は貴国近辺であるから、万の世話を宜しくと頼まれたので、家康公は、それは御心配なくと応じて、約束通り川尻方へ度々使者や書状を送り気を配っていた

しかし川尻はこれを全く有りがたいと思わず、内心家康公へ遺恨を抱いていた。理由は武田家の諸浪人は縁や伝手を求めて徳川家に奉公を願ひ、川尻に奉公しようと言う名ある武士は一人も無かった。この事から色々推量して、専ら家康公には裏があると思っていた。その結果、侍百姓に限らず甲斐国人には全く気を許さず、上方より連れてきた僅かな家来だけを頼みとして相談していたので、国中の政治は何の進展もなかった。

そんな時信長公の他界があり、上州厩橋の瀧川左近なども関東を捨て上洛するとの説もあり、川尻も甲州に嫌気がさしているとの情報が家康公の耳に入った。そこで本多庄左衛門に諸事の事を指示して甲州へ派遣し、何事でも心置きなく相談されよ、もし上方へ登るお考えなら、この時期信濃經由は危険です。此庄左衛門を案内として私の領内へ出られるなら安全に上洛できるように取計らいますと伝えた。

ところが川尻はこの事に疑いを持ち、悪巧みを廻らし兇性に命じて、六月十四日の夜、午前四時頃庄左衛門の寝首を掻かせた。庄左衛門の家来達が走り散って人々にこれを告げたので、徳川家へ奉公が決まり妻子など引取る為に甲州へ帰り合せた人々が早々浜松城に進軍した。一方甲州の諸浪人が是を聞いて川尻の悪事が知れ渡り、家康公へさへこの様な事をする以上最早遠慮は要らぬと、忽ち一揆を起して川尻を攻め、首は三井十右衛門と云う甲州士が討取った。

この頃浜松では本多庄左衛門が川尻の居宅で死亡した事が報告された。家康公は、信長との約束を守り随分と川尻の事を考えてやったのに、それに感謝するどころか全ての相談役にと思っ派遣した本多を殺すとは全く不義理な事だ。それにしても惜しい武士を川尻の奴に殺されてしまったと涙した。家老達は、信長と一旦の約束は果されたのですから、此上は軍勢に向けて川尻を滅ぼす以外ありませんと声を揃えて進言した。

しかし家康公は、それは川尻と同じ事になり、この家康がやる事ではない、先ずは此の俣にせよとの事で家老達もそれ以上は云い様もなかった。

川尻が自滅し甲州が無主の国になると、北条氏政の子息氏直は武田信玄の孫であり、血統から見て甲斐の国を得る権利があると小田原で検討を始めたとの噂があった。徳川家に採用された甲州の武士達は故国が北条の国となる事は由とせず、一時も早く徳川家が甲州に軍勢を向けて戴きたい、そうすれば昔の仲間達とも協力するので直ぐに一国が手に入る筈ですと云う。

しかし家康公はこの意見を取上げず、一筋に信玄公と勝頼二代の間武勇で名を挙げた直参の侍の調査を行い、由緒又は手柄の内容を書き出させて採用する様にと、成瀬吉右衛門と岡部弥三郎の兩人へ命じた。その結果武田家の諸浪人の大身小身、上下共に徳川家に望みを掛けない者はなかった。又信玄の菩提所であった恵林寺は信長が焼払ったが、その跡に以前の様に寺を建て位牌を立てる様に指示し、その資金も提供した。其上勝頼が討死した場所にも建物を建てる様にと大変丁寧な指示で、甲州の武士達は云うまでもなく町人百姓迄もそれを聞いて有りがたい事と喜んだ。

其後北条家が軍勢を送り甲州を征服しようとしていると甲州全体の人民からの願いがあり、家康公は七月十九日始めて出馬した。其時甲斐の国人達と北条家との争いは一に黒駒、二に恵林寺前、三に天目山、四に岩崎、五に小倉の江草、其外所々で競り合いがあり、都度甲州国人が勝利を得て、討取った首は家康公の旗本へ持参した。

其年の十一月、甲州若神子で北条氏政と対陣した時、家康公より北条美濃守氏親へ書状を認め、使者となった朝比奈弥太郎は書状箱を首に掛け、只一騎で馳せて北条家の先手を勤める大道寺駿河守政繁の陣へ乗込み大声で、私は家康の使いの者です、北条美濃守殿の陣はどちらでしょうかと云うので、駿河守が配下に案内をさせた。弥太郎は美濃守の陣へ行き、直接書状を渡した。美濃守は氏政の本陣へ持参し、封の俣差出すと氏政はこれを見て直ぐに北条一門や家老の面々を呼び集めて会議で一決して美濃守に委任した。

其後大道寺駿河守の嫡子孫九郎を美濃守が連れて、新府中の家康公

陣場へ参上し、榊原式部少輔を介して美濃守は家康公と対面した。昔駿府の今川家における人質時代の朝に暮に出会った時の物語などをし、その上で和談について美濃守に伝えた。美濃守は帰るにあたり孫九郎を暫く榊原式部少輔に預け、再度参上して和談が正式になった後、孫九郎を連れて帰った。家康公側室の西郡局が生んだ姫君を北条氏直に嫁がせる約束で和談は成立したが、氏政の家老の倅を美濃守が伴い、和議が成立するまで甲府に人質として留めた事は北条家が徳川家の旗下になったのも同前の様子だった。この対陣により甲州全体が徳川家の手に入り、一方北条家は、笛吹峠を越えて信州へ進出し、芦田、小室の四城を攻め取り、上田の真田迄も一端は北条家の旗下になった。

註1 この時の大道寺孫九郎は作者大道寺友山の祖父と云われる。

註2 北条美濃守は北条氏政の弟で、幼少の頃今川家へ人質として出されており、家康とも今川家の屋敷内で交友があった

岩淵夜話別集第一巻終



家康所用齒染具足
(久能山博物館蔵)

岩淵夜話別集第二卷

- 第十八話 北条氏政と面会
- 第十九話 甲州武士の採用
- 第二十話 秀吉と一戦、長久手の戦
- 第二一話 甲州流軍規の採用
- 第二二話 背中の腫物
- 第二三話 本多作左衛門の人柄
- 第二四話 秀吉と親交
- 第二五話 家臣の加増
- 第二六話 武田信玄の死
- 第二七話 父子の隙間風
- 第二八話 嫡子信康の自害
- 第二九話 小宮山兄弟の事
- 第三十話 長久手戦を語る
- 第三一話 小僧ニケ条の咄

第十八話 北条氏政と面会

天正十四年（1586）三月、北条氏政へ始めて面会したいと家康公より打診した。氏政より木瀬川を隔ててお目にかかりましよう」と回答があつた。

家康公は、それでは両家が親しいとは云えないので、木瀬川を越えて家康が参上しようとの考えだつた。酒井左衛門尉がそれを聞き、それでは徳川家が北条家の旗下の様に聞こえるのでよくありませんと申上げた。家康公は、仮令北条家の旗下だと思われても私は構わないと云い、木瀬川を渡つて三島で対面した。その時、此方では貴国との領分の境目の城は不要であるとして三島から帰る当日、北条家から見送りで付いて来た山角紀伊守の目の前で沼津の城堀を崩す様に指示した。

五年前甲州若神子で北条家から人質を取つて和睦した時とは全く違い、今度は全く其様な事もない。一体どんな賢慮でそうされるのだろうか」と皆が思った。

註1 家康が北条家と同盟を急いだのは秀吉との対峙のためと考えられている。前年秀吉と長久手で戦い、和議を結んだがこの時点では未だ秀吉政権の与党にはなっていない。

註2 家康側室西郡局の生んだ督姫は氏政の嫡子氏直の正室
氏直は天正十九年高野山で病死後、督姫は池田輝政に再嫁

第十九話 甲州武士の採用

天正十（1582）年甲州処理に際し武田家の諸浪人が徳川家に採用

された時、以前の知行高及び知行所を偽りなく夫々が書出して申告する様にと云う事で、曾根、岡部、成瀬の三人が命を受け甲府へ行き調査した。これに付いては信玄時代からの目付達を動かし、岩間大蔵左衛門も相変わらず全ての事を聞き質して信玄や勝頼の時代の様に委しく報告する様にと指示があった。

しかし流石に甲州武士だけあり、武勇手柄については十の内二ツ三ツも内輪に申告したが偽った申告する者は一人も居なかった。しかし知行関係の申告には些細な間違いもあった。其間違いとは例えば親の隠居領知又は兄弟へ分知して跡取りが絶えたものを自分に取り込み、知行高を上乗せする類である。三人の奉行衆も混乱の時であり、細かい調査をする事もなく各人が申告した書類通りに本領安堵の朱印を発行した。是も又家康公の内意で早急に決定する様にとの指示だった。今でも甲州の人士の間で横紙の朱印状を伝えているのは此時の物である。

後々の調査でこの書付の間違った分は召上げられる事もあり、又人によつてはそのまま拝領する事もあった。

ここに初鹿伝右衛門と云う侍があり、彼は加藤駿河守の二番目の子で弥五郎と云った。去る日初鹿源五郎が川中島合戦で上杉謙信の旗先に向つて大きな働きをしたが討死した。しかし継子がなかつたので知行は召上げられたが、信玄は其忠死を思い、且又原美濃の婿だったので後家を特に哀れみ、加藤弥五郎を伝右衛門と改めて初鹿の名を継がせ、後家と添う様に指示した。

しかし彼後家は賢女であり、二夫にまみえる事を恥て甲府の城中へ駆け込み、信玄の奥方に奉公して一生後家となる覚悟だった。そこで後家の妹を伝右衛門の妻として、皆が世話して初鹿の家を相続させた。

此伝右衛門は養父源五郎に劣らぬ武勇の者であり、家康公が甲州経営に乗出す時以来、所々を奉公で走り回っていた。そこで徳川家に採用され、自身の元知行の申告を曾根下野、岡部次郎右衛門の兩人へ渡す際、自分の本領を四百貫と実父加藤駿河知行の内貳百五十貫と書入れて提出した。

駿河知行の後継は長男の加藤丹後と三男弥平次郎と云い、兩人共伝右衛門の兄弟であるが、他家へ養子に行った伝右衛門が親の知行を取る理由はないと云い、丹後、弥平次郎と伝右衛門の兄弟間で口論が起こった。そこで奉行達は相談して、伝右衛門が申告した食い違い分を取上げて本領の四百貫だけを認可した。

伝右衛門は、人に依ては親兄弟の知行を自分の高に加算して申告して其の俣認められた者も居るのに、自分だけは認められず吟味に迄至って面目を失ったのは悔しいと腹を立てた。そこで既に認められている朱印状の知行二ヶ所の村に墨を塗り、私の朱印状は反古になり無効となった。どんなに働いても推薦して呉れる人が居なければ全て影の働きでしかないと人々に悪口を云った。

この事を岩間大蔵が聞き、日頃伝右衛門と不仲だったのでこれ幸と特に念入りに訴状を認めた。目付達が調査したところ岩間の云う通りだったので、家康公はたいへん立腹し、伝右衛門は信玄勝頼時代より武功もあるので、奉公さえきちんと勤めれば出世もできるのに、朱印状に墨を塗り、その上色々悪口を云うとは全く不屈者である。当然成敗されるべきだが、代々武勇の家に生れ、自身も心掛けもあると云う事で命は助けられ改易となった。

ところが長久手の合戦に伝右衛門はこっそり参加し、旗本では三宅弥次兵衛と伝右衛門の二人は四月九日の合戦前によく働き手柄を立てた。弥次兵衛は今日の一番手柄と早速誉められた

そこへ初鹿(伝右衛門)も討取った首を持って内藤四郎左衛門に近づき報告を頼むと云った。しかし前に改易となった者であり内藤も対応に困っていた。その時十間程隔てた所で家康公の目に留まり、伝右衛門、此処へ参れと直接に言葉があった。

御前へ出たところ、其方の事は皆の見せしめの為一旦は改易を命じたが、二年以内に呼び戻す積りでいた、この戦いに参加して大きな手柄を立てた事は神妙であるとの言葉があり、初鹿は涙を流して、忝ない次第ですと云ったところに三宅弥次兵衛が出て、私を一番の手柄と先程決定して戴きましたが、伝右衛門は私より一町半程(約180メートル)先で手柄を挙げましたと報告した。家康公は正直な申告と云い益々感心した。

註1 初鹿伝右衛門の挿話は落穂集になく、本書だけである

第二十話 秀吉と一戦、長久手の陣

天正十二年(1584)春三月、織田信雄は秀吉公を討亡して天下の権を握ろうと云う野心があった。このため家臣の松島城主津川玄蕃丞、星崎城主岡田長門守、刈安賀の城主浅井田宮丸三人を長島の城中で成敗した。この三人は秀吉公と常々関係の良い者達なので、今度の計画を相談しても決して同意しないだろうと推量して処分したものである。

ところが信長公の時代に取立てられた諸大名に信雄から回覧状を廻して協力を依頼したが、池田勝人、森武蔵守を始として一人も味方する者がなく、却つて秀吉公へ内通して敵対する立場を取った。家康公へも最初より頼んできたが、明確な同意の答えをしなかったが再度依頼があり、これまで依頼した者達は全員同意無く信雄は孤立してしまいました。このままでは私の身上の破滅は明らかです。何とかが協力下さいと熱心に頼んできた。家康公の返答は、今度秀吉と戦われるにあたり、信長公の御恩に預かった人々へ協力を頼まれたが賛同が得られず、偏に私に依頼された事承知しました。家康は信長公の御芳情を今でも少しも忘れていないので貴殿の事を疎んじる事はありません。御頼みに応じて家康が協力しますから少しも御心配なくと伝えた。

一方秀吉公は十二万余の軍勢を仕立て既に大阪を出発したとの噂があつたが、家康公は少しも驚かず清洲の城へ向かい信雄と対面した。その後羽黒、小幡、長久手と三ヶ所の合戦に毎度家康公の先手で勝利を重ねた。中でも長久手では井伊万千代の隊から打ち出した鉄砲で森武蔵守を討落し、池田勝人を永井右近が討取り、勝人の子紀伊守を安藤帯刀が討取った。秀吉公は大いに怒り、ここに至つては私が長久手へ行き家康と一戦して森や池田に手向けようと云い、楽田を出発して龍泉寺辺迄押出した。一方家康公はその事を予測して素早く小幡の城へ引いたので秀吉公は空振りとなり途中で引返した。その後秀吉公は大坂へ軍勢を引き上げ、伊勢の各地の城を攻めたが程なく信雄と和睦をした。これは家康公が信雄を見放さぬため勝利は難しいと考えたからだろうと人々は語り合つた。

第二十一話 甲州流軍規の採用

甲斐国が手に入った時、甲州武田家の旧臣の山形、一条、土屋、原隼人の四家配下の大部分は井伊兵部少輔直政の部下として配属した。信玄の家の中では赤色の武器で揃え大変見事だったので、井伊直政の部隊も赤色の武器に統一せよと家康公は指示した。又軍法やその他の制度を甲州流一色に改めた。

この時和田加助と云う山形の配下の侍も採用された。彼は信玄時代に上州箕輪の城攻めの時に峰法寺口で手柄を立てたと云う事をその後兵部少へ申告したので、兵部少は其旨を報告した。家康公はそれを聞き、広瀬美濃と三科肥前の兩人へ其様子を尋ねたが、事実でない事が明らかとなり即時に解雇した。武士道に関する事は厳格に

調査があり、少しも虚飾を申告する事は出来なかった。この加助は外に手柄もある者だったので鳥居彦右衛門が彼を浪人の身分として扶持を与えていた。この事を彦右衛門と仲の悪い者がそつと家康公に耳打ちすると、彦右衛門めは憎いやつとだけだった。

第二十二話 背中の腫物

天正十三年（1585）三月浜松城、家康公の背中に根太の様な腫物ができたのを佐原作十郎、前島長七郎、河野甚太郎と云う三人の児小姓へ、この根太の根を押し出せと指示した。彼らは強く押出す事が出来ず、ぐずぐずしているので家康公はもどかしくなり、男子の様でないぞと叱り、蛤の口で挟んで引き抜けと命じた。

若年の彼等は何の考えもなく、云われる通りにしたところ、白い芋の様な物が一―二寸程抜けたので、これを見せたところ、家康公は、これで良しと云った。

暫くすると腫物が急に腫れ上り痛みも酷くなり、胸に迄痛みが広がりたいへんな苦痛に見られた。家中では残らず城に詰め手に汗握り医師達も色々治療を勧めるが次第に腫物の様子は悪化し、後には腫物の周りを手で軽く触れる事も成らぬと云うので薬を付ける事も出来ない。家康公も内心もう駄目と思つたか、家老達を呼び遺言を伝える程の状態であり、近国では既に死去とも噂された。

そこで本多作左衛門が御前へ出て、以前に私も腫物の治療をしました。脇屋長閑の薬をつけられると良いと申し上げたが、家康公は全く同意しなかった。作左衛門は腹を立て、殿がきちんとした治療をせずに大死をされる事は全てご自身の考えとは言え、たいへん惜しい命です。最早九割方快復は難しいと医師達も言っております。兎に角この作左衛門はお先へ行くべき年寄りですから後からお供はいやです。そろそろお先へ行きます、この世のお別れは今申上げますと云って涙を流し御前を立った。

家康公はそれを見て、あれを止めよと云い、さては其方は気が違つたか、私の病気は重いが未だ死んだ訳でもない。もし死んだとしても後の事が大切である。其方などは特に元気であるから一日でも生き長らえて若い者の指導をするべきを何の役にも立たぬ先の追い腹を切る事は成らぬと叱った。

作左衛門は、いや、それは殿のお言葉であります、人によりけりです。私なども今の歳より廿も三十も若ければ、殿の様な無分別の

人のお供などしないでしょう。しかし当年八十にもなり、若い頃からあの戦、この戦とお供して片目は切潰され、手の指等も切りもがれ、足迄もびっこになりました。世の中の片輪と云う片輪を一人で背負っておりますので、通常なら一人前ではありませんが、今日迄殿の御厚情で家中でもそれなりに地位を保っております。

今殿が死去なされば他人は勿論、ご親戚の北条氏直殿始め、お持ちの国を狙うのは目に見えております。御家中の諸人も働き盛りの殿に去られたら力を落とし、はかばかしい合戦も出来ないでしょう。そうなれば御跡は潰れる以外ありません。その時迄私が生きていれば、あれこそ徳川に仕えた本多作左衛門と云う者だ、何を樂しみに命を惜しんで生きているのかと、後ろ指されるのでは生きている意味ありません。最近でも武田殿の家中で浅利殿と云えば諸人に尊敬された武士ですが、主人の運が傾き今は当家に仕えて本多平八郎の配下になり、松平一党や匂坂一党の者達の下に甘んじているのを見るのも哀れです。是は人事とは思いませんと順々に道理を述べて涙を流す。その時家康公は、其方の言う事も確かにその通りだ、治療を其方に任せると云った。そこで直ぐに長閑が薬を持参し、お灸は双六の筒の大きさにして作左衛門自身がすえた。更に内薬も服用したところ早速効きめが出て、其夜半頃に腫物が破れ大量の膿血流れたので、作左衛門は声をあげて嬉し泣きに泣いた。やがて腫物は平癒した。

第二十三話 本多作左衛門の人柄

秀吉公が小田原の北条征伐に進発の時、家康公は浜松の城を明けて秀吉公を招待し大いにご馳走をした。その時作左衛門は用事で出かけていたが、秀吉公が浜松へ着いた日に旅先から戻ると、そのままの格好で登城した。秀吉公の一行は軍旅とは言っても始めての浜松城入りであり接待の様子は盛大なものだった。そこで作左衛門は苦々しく不機嫌な様子で、秀吉公の旗本や上方の大名達が居並ぶ中で家康公に向かい大声で、殿、殿と呼んだ。そして、さてもさても殿は珍しく馬鹿な事をなさる。一体国持ちの大名ともあるう人が、自分の居城の本丸を明けて一夜でも人に貸す事が有りましたようか。こんな事では殿は女房を人に貸すのですかと苦々しく罵りそのまま家に帰ってしまった。

家康公は、何を戯けた事を言うかと云い、一座の人々に向かって、只今奴の屁理屈を聞かれましたか、今日のこの席では極めて不適切な事です。あの男は本多左衛門と云い、当家譜代の者で私が若輩

の頃から奉公を勤めて出陣毎に供をして勇猛で名を挙げた者ですが、たいへんな気難しい我侷者です。人を生きた虫とも思わぬ様な性格の奴です。皆さんが御聞きになる所でさへ、この様な様子ですから私と差し向かいの時をご推量下さい。通常ならまだしも本日の席での態度は不届き千万な事ですと述べた。一座の人々は口々に、作左衛門の事は上方でも噂を聞いておりますが、この様な良い家来を持たれるのは貴重な事と思えますと一応に挨拶があった。

この作左衛門はたいへん無骨で無分別の様に見える。ある時領内の諸事務を遂行する三奉行の中の一人に指名された。その時家康公の旗本内での評判は、こればかりは家康公のお見立てが違うのではないか、作左衛門に限り奉行職等は一日も勤る人柄ではないと囁かれた。しかし意外に何の間違った判断もなく、勿論依怙鼻屑等は全くせず公明に処理するので、家康公の眼力は凄いと皆感心した。其時の評判では三奉行を仏の稲垣、鬼作左、どちらつかずの天野三兵と云った。

全体にこの作左衛門はくどいのを嫌い手短な処理を好む性格だった。ある時旅先の宿から妻に送る手紙に、一筆申す火の用心、おせん泣かすな馬肥やせ、かしく、と書いた。おせんとは作左衛門の独り娘の名だろうか。

註1 この本多作左衛門の手紙は「一筆啓上火の用心、おせん泣かすな馬肥やせ」と短さと簡潔な例として今でもよく引用される。

第二十四話 秀吉と親交を結ぶ

織田信雄の仲介により、家康公の次男三河守は十一歳の時、上洛して秀吉公の養子となり秀康と名乗った。これを機会に秀吉公は家康公と親交を結ぼうと時々使者の飛脚を送り音信を計ったが、家康公は全く取り合わなかった。

或時羽柴下総守が浜松に下って来て、秀吉公及び秀康公父子へ面会の為、又暫く上京もされていなかったので慰みに近く上洛されては如何ですかと誘った。家康公はそれを聞き、秀吉と会う用事もないし、秀康は昔は我子だが今は秀吉の子である。親父秀吉にさへ用もないのに増してや若年の秀康には用はない。其上信長の時代に度々上京した事もあり都が珍しい事もない。今の楽しみは領分を廻り、泊り掛けの鷹狩りをする事が一番である。いずれにせよ私が上洛する必要はない。もし秀吉が威勢に任せて私に出仕させようと思うならそれは秀吉の奢りである。万一そうなら有りの俵に言いなさい、

家康の心得とするからと答えた。

下総守は、いやいや決してそんな事はありません、上洛の件は私の考えで申上げたものですと言つて帰り、秀吉に事の次第を報告した。その後秀吉公は妹朝日を浜松の家康公へ嫁入りさせ、更に母の大政所を岡崎の城に人質として送った。

これにより家康公も終に上洛し、秀吉公と親交を結んだ。

註1 織田信雄支援の為、秀吉と長久手で戦つたが、信雄と秀吉が和睦し、信雄が秀吉と家康の和睦を仲介した。

第二十五話 家臣の加増

天正三年(1575)家康公三十四歳の時、近藤某に加増を与えた事があつたが、この加増の地は大賀弥四郎が代官を勤める地域にあつた。この弥四郎は元中間だつたか、才覚も土地勘もあり、事務処理に有能だったので財政向きの事を任されており、地方の代官職をも勤めて居た。通常は浜松城に詰めていたが、時に岡崎城にも滞在して信康公の用も勤めていたので、弥四郎が居なくては困ると上下共に思う程重宝されていた。

ところが此弥四郎は次第に身の程を忘れ、増長して近臣の振りをしたり、旗本で実績ある武勇の譜代の者でも自分とそりが合わぬと悪く上に取成した。又城内、道路で出会つても見ぬ振りをしていた。不屈者とは思つたが、家康公の近くで出世しているものなので、皆口を閉ざしていた。

この様な弥四郎の所に近藤が加増地受取りの相談に行くと弥四郎は近藤に、貴殿の事を御前でよく報告したので今回の加増に預かつたものである。益々熱心に奉公すると同時に私の事を決して疎略にしない様にと云つた。近藤は非常に不愉快となり、その場から直接家老衆の所へ行き、今度拝領した御加増は返上致します、私は受取れませんのでこの件を上にご報告願いますと云う。家老衆は、不審な事を言うとその理由を尋ねると近藤は、大賀弥四郎が私に云つた事は今度の御加増は自分の取成しで下されたものであり、益々奉公し、以後私を疎略にするなど云いました。いくら私が薄給で経済困窮といつても、この徳川家で有名な大悪人の弥四郎奴等に少しでも取成しで加増を拝領できたと云われては武士の穢れです。米一粒も戴く訳に行きません。こう申上げて不屈と思われ切腹を命ぜられれば、それはそれで皺腹を切りますが、弥四郎の取成で加増など神に誓つて戴けませんと言ひ放つた。

家老衆も自分達では納まらぬと見て家康公に報告した。早速近藤が呼ばれてお尋ねがあった。近藤は日頃見たり聞いたりした弥四郎の悪事の数々を証拠を添えて正しく言上した。家康公は詳細を聞き、これ程の悪事を企む弥四郎の事が家老衆や目付衆から全く報告されなかった事は不届千万に思い、厳しく調査したところ、弥四郎に一味の山田八蔵と云う者がいたが、彼が寝返り訴え出た事は、弥四郎が仲間を募り、足助の城を攻めて武田勝頼を岡崎の城へ引入れようと企てて居る事を告げた。そこで弥四郎父子夫婦、以上八人を逮捕して磔とし、その外の仲間も成敗された。弥四郎は浜松・岡崎の両城下の町を引廻し、その後岡崎の四辻で首より下を土中に埋め、竹鋸で首を引かせて磔となった。

近藤については広忠公の時代から各地の戦いにお供して武道の心掛けも深い人物だった。ある時家康公が岡崎城の近辺で鷹狩りに出かけた時、田植えの人々の中に近藤が交り早苗を取っていた。家康公を見ると、近藤は田の中へ顔を突込み泥を付け悟られぬ様にしたが、その前に既に家康公は見えていた。お供の人々に、あれは近藤ではないか、近藤なら呼んで参れとの事でお供が走って行き近藤殿、お呼びですと云う。近藤は仕方なく、分りましたと云って顔を泥水で洗い、田の畦にたてた棒に箕笠を掛け、棒の下に括り付けて置いた刀、脇差を指して道へ上がり御前に畏まった。その身に着けた渋帷子は破れ、縄をたすきとして目も当てられぬ程である。仲間達はこれを見て困った事になったと皆冷や汗をかいた。しかし上の考えは全くその様な事でなく、主人が小身だから、其方等を初めとして家中の者達に知行を増やす事もできない。今の知行だけでは人や馬、武具等を十分に用意できないので自身が作付けをして苦労している事は気の毒である。しかし今は我慢して下働きをしても生計を立て奉公せよ、誰もが先に苦労した後で楽が出来る様にするのが良いぞ、早く仕事に戻れと家康公は泪ぐんで説いたので、近藤は勿論、お供の人々も皆涙を流し有難く思った。

註1 この挿話は友山の他の書になく岩淵夜話だけである。

第二十六話 武田信玄の死

天正元年（1573）四月十二日、武田信玄が五十三歳で死去したと云う噂が浜松城下に流れた。その時家康公は、信玄の死去が事実ならたいへん惜しい事である、信玄程軍事に勝れた大將は古今珍しい。私は若い頃から信玄の様に軍事に勝れたいと思いい心掛けて来た。従って信玄は私の軍事の師匠である。今は断交

しているので弔いの使者は送らぬが、隣国の名将の病死を悦ぶ事ではないので家中の皆もその積りで居れ。 仮令敵であつても有名な武将の死去を聞いて痛み悔む事は武士の心である。 其上隣国に強敵の有る事は特に良い事と思う。 理由は此方も少しの油断なく武士の勤めを行い、仮令政治を行うにも敵国に聞かれる事を憚り蔑みを恥じるので、自然と政道も違わず家法も正しくなるから味方の長久の基盤でもある。 一方隣国に強敵がなければ味方の武備は薄くなり、上下共に自分に満足し、他人に恥じる事もなく努力を忘れ弱体化する事になる。 依て信玄の様な敵将の死は少しも悦ぶ事ではないと語った。

是を聞いて末々の者迄、上を学ぶとかで信玄の死去を口真似の様に悔んだ。 但し在郷の百姓や町人に関しては、信玄在世の時、ややもすれば三河、遠江両国の間へ侵入し、その度山中に避難する事が嫌で信玄を疎んじており、死去を聞くと大いに悦んだと云う。

第二十七話 父子の隙間風

天正五（1577）年八月、武田勝頼が二万計りの軍勢で横須賀へ侵入し浜辺に沿つて陣を取った。 家康公は父子共に出馬して横須賀より四町程北にある丸山に布陣した。 家中の面々は浜辺へ部隊を進め警備した。 しかし敵味方の間に入江があるので互いに鉄炮を撃合うだけで、大きな競り合いもなかった。

そこで信康公は鈴木長兵衛唯一人を伴い、勝頼の旗の立つ場所から二町程近くへ乗込み様子を見て、家康公へ是非合戦をされるべきと申上げた。 家康公は、敵は大軍、味方は小勢であり、場所も良く無いので戦つても勝利はない。 今後この様に考えよ、しかし若者らしい心意気と云つたが合戦はしなかった。 帰陣後家老達へ家康公は、信康が私に軍事の指図するなど行過ぎである、どうも自分の考えだけで事を進めるのは良く無いと語った。

第二十八話 信康の自害

天正七（1579）年家康公と信康公との仲が悪くなり、信康公は岡崎城から二股城に移された。 家康公は服部半蔵、天野山城の兩人に立ち会いを命じて信康公の切腹が決まる。 信康公は最後になり兩人に云つた事は、自分の誤りも多いので今更言訳ができるものでもないので斯くなつたのは当然である。 しかし謀反に關しては全く毛ほども覚えがないのに無念であるとなじみの

人々に伝言があった。死後の菩提は大樹寺の和尚へ頼むので宜しく伝えよとあった。

いよいよ切腹に及び、半蔵に介錯を頼むと伝えたが、半蔵は落涙して全身に震えが起こり刀を抜く事もできない様子である。時が立つと苦しみも増すので良くないと天野山城が代って介錯した。信康公享年二十一歳で八月十五日に自害である。

信康公の最期の様子は目付衆から委しく報告されたが家康公は、半蔵めは並外れた武勇の者だが、信康の最期に至り腰が抜けたな、それも道理だと語った。

第二十九話 小宮山兄弟の事

家康公は小田原攻めの部隊編成する時、旗本の役人に指示して、小宮山又七郎を長柄鎗奉行に任命した。その時の意見として、又七郎は未だ若年ではあるが、この役を申付けよ、その理由は兄の内膳は武田勝頼の近臣として奉公していたが、仲間の讒言で勘当となった。しかし蟄居の身で有りながら勝頼の最期の場所へ尋ねて行き、勘当を赦されて悦んで最期の供をした。その心掛は武士の手本である。其内膳には子供がなく、跡を継ぐ者がないので不憫に思い、その弟の又七郎を呼出して一家を立てさせたものである。今度この様な役に任ずるのも兄の内膳に対するものである。此趣旨をよく心得て自身の誉れと思わず、兄内膳のお陰と思う様にとあった。

第三十話 長久手の戦いを語る

家康公より浜松城である夜家老達に話しがあった。以前長久手の一戦の時、私は小勢で秀次の大軍の跡を追い一戦を仕掛、水野、岡部、榊原、大須賀、本多等の働きで三万に及ぶ敵軍を切崩した。中でも秀吉が大切にしていた侍大将の森武蔵、池田勝入父子を討捕って其首を見分していた。そこへ高木主水、内藤四郎左衛門が来て注進したので早々小幡の城へ部隊を引き入れた。案の定秀吉は味方の敗軍を聞いて大に怒り、直に楽田の本陣を出て竜泉寺迄到着した。しかし私が小幡の城へ引取った事を知ると止むを得ず其夜は田中に陣を張り、夜明けに小幡の城を攻めるための準備をしていた。

其夜諸君は相談して秀吉の陣の様子を窺がったところ、二万余の軍勢の統制はなく野山に我勝ちに陣取り、夜襲に備える心掛けも無い様子であるから、夜襲を仕掛ければ簡単に大勝利が得られますと進言した。家康はそれに同意せず、結局その夜の間に密に小幡の

城を明けて小牧へ帰った、これを手緩いと諸君始、家中の者達は論評したと聞く。それに付いて其夜田中の陣へ夜襲を掛ければ、秀吉を確実に討取る見込みが有って進言したものか、又それは別として戦いには勝つという公算があつての事かと質問があつた。

其時の一戦にお供した家老達ばかりであり、互いに目を見合わせ即答は出来なかつたが、漸く誰も秀吉公を必ず討留めると云う見込みは有りませんでした。勝利は間違いないという公算で申上げましたと答えた。家康公は、多分そうであろうと私も推量した。例えば田中に布陣する軍勢を一騎も残さず討取つても、秀吉と云う人を討洩らして、丸裸になつても上方へ逃げ帰らせばそれは家康の身の為には良く無いことである。思えば長久手合戦で森、池田父子三人を討取つたが、独りだけでも良かったのにと思ふぞとの事だつた。

註1 長久手の戦 天正十二年(1584)三月秀吉との戦い、

同年九月 和議成立

第三十一話 小僧三ヶ条

家康公はある時家老衆へ咄をする際、諸君は小僧三ヶ条と云う事を知っているかと尋ねた。誰もが承つた事はありませんと答えたところ、それでは話して聞かせようとなつた。

ある山寺の和尚が村から一人弟子を取り、小僧として使っていた。その小僧がある時逃出して親元に帰り、私はこの様に頭を丸めた以上、何とか学問を修め出家として生きたいと、今まで随分我慢して見ましたが、師匠の僧が余りにも無理な事ばかり言い、折檻をするので逆も修行を続ける事が出来ず帰つて来ましたと云つた。

親達はそれを聞き、それ程難しい事とはどんな事があつたのかと問えば小僧は答えて、これが決定的と云うものはありませんが、中でも困つた事が三つあります。第一に師の坊髪を剃る事を練習せよと剃らせました。私は練習中ですから時々剃刀の先が頭皮に入り、血の出る事があり大きな折檻をされました。第二に味噌を摺る様に云われますが、摺り方が悪いと朝夕叩かれます。第三に用便を足しに雪隠へ行けば、又雪隠に行くのかと叱られます。つまりこんな状況で一生勤まるものでしょうか。

親はそれを聞くと、そんな訳ならお前が居た堪れなくなるのも当然だ、いくら弟子にしたからとて師の僧はけしからんと立腹し、即刻寺へ行き和尚に面会して散々文句を述べ、小僧を取り戻すと云う。

和尚は聞いて、一般に僧門の勤めは難しいものであり、子供を二親及び親類迄も含めて出家させたいと思っても成達は稀なものである。まして其方なども小僧が言う事を真実と思い、とやかく言う様では迎も出家を遂げる事はできない。希望通り小僧を貴方に返しましょう。しかしこの事は他の諸旦那衆へ聞こえる事でしょうから、小僧の云う三ヶ条の実情を述べましょう。

先ず味噌の摺り方が悪いと云う事は特別な事ではありません、寺でも一般家庭でも味噌はすりこ木で摺るものです。それを小僧は塗均子の背中で摺るので、朝夕私が注意しても全く聞入れず、今日迄杓子二三本も摺り潰しました、と棚の隅からこれを取出して見せた。

次に雪隠へ行き用を足すのを叱った事ですが、これも理由があります。あなた方も知っている様に、毎年代官衆が当村を来られた時は、当寺が定宿になっています。雪隠所が遠くては不自由だろうと云う事で村中相談して客間の近くに新しく雪隠を作りました。是は代官衆応接の為であり愚僧を始め誰もこの雪隠には行きません。ところが小僧独りは是を使うので度々注意したが聞入れません。

さて又髪を剃る事は出家の勤めとして大切な事であり、何としても剃り覚えよと私の頭に筆紙を添えて手習いさせました。やがてそり覚え、この頃では自分自身の頭をそる程習熟し、人の頭はそれ以上に手際よく剃ります。そこで最近私の頭を剃らせたところ、わざとこの様にしましたと頭巾を脱ぐと、何十ヶ所とも知れぬ切り傷があり、頭中に血の跡と傷葉が付いていた。

小僧の親は吃驚して両手を打って困惑して色々詫び言を云ったと言う。

是を小僧三ヶ条と云って、簡単な事に見えるが、国持大名を始め、その下の家老、用人、奉行、目付、横目の役等を勤める人々はこの気配りが肝要である。一方の咄だけを聞いて判断するような場合、特に間違いが有り勝ちなものであるぞと家康公は語った。

註1 この挿話は落穂集追加にもある

註2 第一巻及び第二巻の各挿話は概ね友山の落穂集前編に年代順に納められている。

註3 岩淵夜話全体では大体年代順になっているが、一、二巻ではかなり挿話の年代が前後している。

岩淵夜話別集第三卷

- 第三二話 金三郎と吉丸
- 第三三話 関東入国と江戸の建設
- 第三四話 浅野弾正、秀吉を諫める
- 第三五話 大久保石見守の事
- 第三六話 蒲生氏郷、曲淵を所望
- 第三七話 太閤秀吉他界後の体制
- 第三八話 石田三成の苦難を救う
- 第三九話 家康公暗殺計画

第三十二話 金三郎、吉丸に草履を履かす

天正の頃関東で下の者に勢いがある事の譬として、千葉に原、原に両酒井と云った。それはその当時千葉は下総の国佐倉に在城し、原と云う家老が笛吹の城に居たが主の千葉殿より威勢が強かった。又原の家来で上総の国堂金の城に酒井左衛門及び同国土気の城に居た酒井伯耆、この兩人とも原の家来であるが、主の原より威勢を振るった。この事を指して当時は一般に云われたものである。

その後天正十八年に小田原の北条家滅亡以後は、太閤秀吉公の命令により北条家が所有した国々は家康公の領地とされ、此年を関東御入国と一般に云う。

ところで北条家の諸浪人は江戸へ出府して、伝手を求めて帳面に登録し徳川家への奉公を望み、検討の上数年旗本として採用された。其時笛吹の原の子の吉丸、堂金の酒井の子である金三郎も同じく徳川家の奉公人となった。

そんな或時山城の国伏見において御城普請の際、家康公が急に庭に出たので当番の者達がお供をした。吉丸は御腰の物を持つ役なので草履をはきに行く事も出来ず素足で炎天下の敷石の上で蹲踞していたが、金三郎がこれを見かねて草履を持って行き履かせた。仲間の者達がこれを見て、最近では珍しい事だ、どんな親しい間柄だろう、諸侍の目の前で朋輩に草履を履かせてやるなど云う事が有ろうかと大変な評判となった。

其頃迄旗本の譜代衆の中でさえも安祥、山中、岡崎などの各時代により派閥があり、新参の者達の中でも上方衆、甲州衆、小田原衆などが意地を張り合い、何か事があると一塊になって互いにけん制するような頃だった。酒井の噂も申上げてはどうかと目付衆が相談して報告した。

家康公も此時の様子を既に見て不審に思っ居たので金三郎に自ら尋ねた。金三郎は、現在は兩人共に御家へ採用された朋輩であります、元を

正せば吉丸は主、私は家来でございます。若い吉丸が炎天に素足では苦しいだろうと見兼ねて草履を履かせたものです、何の他意もございませんと申し上げた。

家康公はこれを聞き、金三郎は若輩であるが武士の本意を弁え、昔の主の子を粗末にしないとは奇特な心懸である、其心からは家康の恩をも恩と思う事だろう、たいへん頼もしい侍であると上意が有り其後加増を下さった。

初めはとやかくと批判していた人々も俄に口を閉じ、家康公の物事に對するご判断は深遠だと感心するばかりである。それ以後は旗本諸人の氣持ちは批判に代わり、主筋であれば云うまでもなく一度でも番頭、組頭として支配を受けた人には、その後どんなに自分が出世しても出合いの時の礼には心遣いをする事が本筋であり、そうでなければやって行けない様な風潮が今日迄の旗本の風俗である。

註1 この挿話は友山著書の中で本著だけに見える

註2 関東入国 天正十八年(1590)八月一日とされ、毎年八月一日は江戸幕府で記念行事が行われた。

第三十三話 江戸の建設

関八州が家康公の領地となるにあたり、居城はどこになるのか未だ発表が無い時、旗本諸人の内十人中七八人は相模国小田原と予想し、残り二三人は鎌倉になるだろうと考えた。ところが秀吉公と相談の結果、武蔵国江戸を居城とする事が発表されたので、諸人は手を打ってはどうした事かと驚いた。

理由はその頃迄の江戸は東の平地は何処も彼処も海の入り込んだ芦原であり、町屋や侍屋敷を十町迄も割付けられる様子では無く、一方西南の方は茫茫とした萱原が武蔵野へ続き何処が果てとも分らない。

城と云っても昔から一国を持つ大将の住んだ物ではなく、上杉家の家老だった大田道灌斎が初め設計築城したもので、其後は北条家の遠山が居住しただけであり、城も小さく堀の幅も狭く門や堀も簡単な様子で、関八州の太守の居城となるような物ではないと人々が考えたのも当然である。

ところが次々と普請の指示があり、旗本の小身衆は地面固めに手間取らぬ様にと御城より北西の辺りに大番町として最初に屋敷割りを指示された。実に予想の通りで、岡の土をひきならして谷を埋めるので普請の手間は少なかった。次には川筋に水除き、汐除きの土手を築き葭原を干上がらせ、所々を舟を入れるための堀川とし、其土により地面を上げて町屋に割下し、それからは段々と諸大名の居屋敷が渡された。

其後天下の御座城となり日本国中の貴賤ともに寄集り家を作るので、

屋敷の敷地は廣大となったが江戸中で田の潰れは少しばかりで、大方は萱原や入海の埋め立てで解決した。特に江戸中へ天下の人民が入り込み、田畑の開発も自由だったので昔から茅だけしかなかった武蔵野も上々の畑に開発され、新たに百姓の家居となった村里は数限りない。したがって御城や大名屋敷、町家、寺社へ掛けてかなりの土地であるけれど田畑の広がった事はそれより遙に大きかった。

このように損得迄も賢慮に洩れる事は何一つなく、今天下の貴賤が集まっても何一つ欠けるものがなく全てが間に合うので万民が住み易くすごせる。これを百年前関東御入国時の江戸の様子を聞き伝えても現在の都の様子は全く考えられない。ところが茅野、芦原の時に将来は必ず繁昌の地であるとして決定された家康公の賢慮には唯々感じ入る次第である。

第三十四話 浅野弾正、秀吉を諫める

太閤秀吉公による朝鮮国征伐で家康公も筑紫国の名護屋の港に在陣している頃である。朝鮮へ渡海した軍勢は異国における長い戦に退屈し上下共に帰国を望み、そのため彼国の征伐は巧く行っていないという噂があった。この咄が秀吉公の耳に入ると家康公ならば前田利家、蒲生氏郷が招かれて、異国退治が是程迄手間取るはずがないのに、此頃では日本の諸軍勢は大小上下共に朝鮮在陣に退屈して皆が帰国の事ばかり考えていると聞くが非常に残念な事である。このような事では到底良い結果も出ないだろう。今度は秀吉自身が渡海するつもりである、その場合には利家、氏郷兩人も同道すること、我国の事は家康が残れば何の気遣もない。ところで秀吉を渡海させる程であるならば朝鮮国の事は当然ながら大明国まで直ちに攻めて、唐人共を全てなで斬りにして四百余州を一瞬にして従えて大明国の王となる事にも何の疑いも無いと大いに広言した。

利家・氏郷も、仰る通り人生は束の間の事ですからこんな時代に生れ異国に武名を残す事は本望至極ですと兩人共に喜んで同意した様子だった。其時家康公は非常に不機嫌となり、利家・氏郷兩人へ向き、そもそもこの家康は不肖の身であります、若年の頃から多くの敵と出合い戦ってきたが、未だに不覚の名を取った事はありません、ところがこの度太閤御自身が出港され、あなた方お二人も渡海され、家康一人が残って日本の留守番とは全く同意できません。此件はいくら云われても承服できず、必ず違背があると思えますと苦々しく云った。

この時浅野弾正が末座より進み出て、是は徳川殿の云われる通りです、

全般に最近の秀吉公の心には狐が入込んでいたのでしようか、以前の秀吉公ではありませんから御腹立される必要はありませんと云う。太閤はこれを聞いてたいへん腹を立て、おのれ弾正め、秀吉に狐が付いたとは何事ぞ、その理由を云えと片膝を立てて責めかかるのを弾正は少しも怯まず、そもそも朝鮮や大明国の者達が日本に対してどんな罪を犯してこの様になったのでしょうか、殿が邪な事を思い立たれた為に日本の諸軍勢が朝鮮へ渡って在陣し、兵糧その外全てに多額の費用が掛っています、夫だけでなく日本国中の人々の産業も安定せず、前線も銃後も貴賤諸人の嘆きを御前はご存知ないのですか、其上更に御自身が渡海され、利家・氏郷迄行くとなると北国から奥州へ掛けて数万の軍勢を引連れる事になります。そうなると日本には人がいなくなり、もし其後の方々で一揆が起こるか、日本国の留守を聞いて異国が攻めて来れば、徳川殿一人がいくら頑張っても何ともならないでしょう、従って留守番は嫌と言われるのは当然です。諺に人を獲るどう亀が人に獲られるとか云いますが朝鮮や大明国を取ろうとしている内に日本に災難が降掛るのは明白です、こんなに考えの浅い殿ではなかったのに、今日の上意の趣意は將に狐の智恵が入替ったものと私は思いますと述べた。

秀吉公はそれ聞くと、道理はともあれ主人に向かってとんでもない奴と、刀の柄に手を掛けるのを利家と氏郷が抱き留めて、弾正は我々が処分致します、御手を汚されるのは勿体ない事ですと宥め、兩人が弾正を睨んで座を立たせようとするが立去らない。その時家康公が座を立つと弾正も見送の為と座をはずしてそのまま自分の陣所へ帰った。秀吉公も妥当な事と思っただか、自身が渡海する事は沙汰済みとなり、程なく弾正も以前の様に出仕する様になった。その頃諸家の評判では家康公の渡海の希望と云い、弾正の座敷の取持と云い、名人の掛合であると云合った。

第三十五話 大久保石見守の事

家康公が常々語った事は、人の主人となつて家来を持つときには二つの心得が必要であり、その者の志を使うか使わないかである。先ず志を使うと云う事は、本来生まれつき律儀であり、主人に尽す事を第一に考え、仲間に対しても我儘でなく誠実で、しかも智恵才覚を兼ねている者がある。この様な者には目をかけ引き立て、一家の取り仕切りや国の政治を任せても安心できる有用な侍である。次に能力を使うと云う事は、その本来の性格はそれ程良くなくても何か一つ勝れた所があり、それが偶々役立つときそれは大いに利益になるものである。是も又目をかけて取立てる様にしなければ物事が進まないものである。この点をよく判断して人本来の性格を知った上で人は使うものであると。

この上意に関して次の話がある

家康公が江戸在城の頃、お見舞として上方より四座の猿楽師が下りお城で能を演じた。諸旗本衆にも見物する様に指示があり料理も用意され、御白洲には町人達も詰めて見物し菓子やお金まで戴いた。この役者達が滞在の間、彼等は替るがわる夜話に参上した。

ある夜の咄で家康公は、家康が若い頃は三河の国半分を領土として、それから段々大身となり今関八州の大守となった、そして今日本では毛利輝元と家康が国数では諸大名の中で最大である、しかし金銀と云物は思う様に持てないものである、金銀が乏しくは何に付けても困るので、どんなに多くても良い物でだが、金銀を貯へるには収入を多くせねばならず、収入を多くしようとすれば人を持つ事が出来ない。人を持たねば国の守りが弱く、戦でも勝つ事ができない。できる事ならば人も多く持ち、金銀をも多く持つ様な方法が無いものだろうかと思つた。其の場の人々も、仰の様に両方共満足の行くようには中々難しい事で御座いますと応じた。

この時金春座の大蔵太夫が座敷の末席に控えていたが、この咄を聞き翌日青山藤蔵の家に行き、昨夜御前で斯々の上意でしたが、その時申し上げたい事が御座いましたが先ず憚り多い事ですし、又大事な内容を他人に聞かせる事でもないと思ひ発言を差控えました。

殿様がお望みの様に人も必要なだけ召抱え、その上お金も十分に出来る方法が有るので申し上げたいと云う。藤蔵も、それは結構な事だ、それが妥当な方法であるなら、早速申上げて其方を推薦するから先ず私に聞かせよと云えば大蔵太夫は、その方法は直接申上げるのでその時に私が申上げる事をお聞き下さいと云う。

藤蔵は登城して機会を捉えて大蔵太夫が云つた趣旨を申上げたところ、家康公は笑いながら、それはどんな方法かなと言う。藤蔵は、私もその概略を聞いた上で申上げるべきと思ひ尋ねましたが、大事な事ですから直接申し上げますので御前で聞いて下さいとの事でしたと云えば、それは良い慰みになるだろうと領いて大蔵太夫を召した。藤蔵一人を側に置き方法を尋ねると大蔵は、前夜の殿様のご意見通り、金銀を貯えるには御領地の百姓から年貢を高めに設定し、収納米を増やして是を売って代金に換えるか、又は山や川から上がる税金を多くお取りになるか、この二つの方法以外には御座いません、併しこれでは御領内の万民が困り、政情不安となりそれを抑えるために御家中に侍を多く採用されれば、とにも角にもお金が貯まる

訳がありません。

是に付いて私は考えますのは御領分の中で所々の山々を調査されれば金、銀、銅、鉄、錫等が出る山が必ず有るはずで。熟練した山師や金堀を呼集めて掘らせて見たいものです。若し金銀が多く出ればその地方も豊かになりますし、第一に土中に埋もれている金銀を掘り出して御用に立てるのでから何の障りにもならず結構な事だと考えますと申上げた。

家康公はそれを聞くと、それは其方自身の思いつきか、それとも誰かその道の熟練者の話を聞いたのかと尋ねた。大蔵は、上意の様に上方には金山に関係する熟練者が多数居り、その者達が話しているのを常々聞きましたと申上げたところ、それでは其方の家業を辞めて金を掘る奉行にならぬかとあつた。

大蔵は、畏まりましたとそれを請け家業の能は弟子に譲り、国中から山師を呼集めて彼等を連れて伊豆の山へ入り、堀人足を集めて昼夜の境もなく掘らせた。予想通り山も栄え多くの金銀を掘り出して江戸の御城へ納入したので、家康公も大変御機嫌で直ちに大蔵を大久保石見守とし、武蔵国八王子に知行を下された。大久保は滝山に住居を構へ、金に関わる手代役の者上下数百人を与力や同心の様に使い、後には伊豆の山だけに限らず所々に金山を発見し、佐渡の国へも渡つて金山を支配した。

石見守はこの様に出世に預かったが、本来の心が邪であるので考え違いも多く、第一に身のほども弁えず奢を究めて色々悪事を働き、これを繕うために諸役人達の機嫌を取り利益を掠める事も多かつた。併しながら自分一代は無事に過ごしたが、死後になってから積る悪事が露顕して、息子二名は処刑され家は断絶となつた。

この石見守は能楽師から召出され、一方本多佐渡守は鷹匠から取立られた者で、それぞれ卑賤な身分から頭角を顕して出世した事は似ているが、その志を使ったか、或いはその能力を用いたかの違いは歴然としているように思われる。

註1 大久保石見守長安 (1545 - 1613) 武田家の猿楽師から家康の財務官僚

註2 本多佐渡守正信 (1538 - 1616) 家康が三河時代から最も信頼した家老

第三十六話 蒲生氏郷曲渕老人を望む

蒲生飛騨守氏郷は奥州に百万石の領知を給つて会津へ入国する時に

家康公の所へ立寄ると、前から連絡も有ったのでたいへん悦んで応対された。家康公は、今度奥州の押えとして会津の城を拝領された事はいへん結構な事です、近国ですから何でも相談できると私も悦んでいます。ところで何か餞別を差上げたいが何でも一つ所望される通り差上げたいと云うと氏郷も、たいへん忝い事でございます、思いがけず大名を拝命し、急に裕福になり十分支度も出来ましたので特に不足の物もございません、しかし折角のお言葉ですからひとつ所望致しますが宜しいでしょうかと云う。家康公も、先ほども言った通り私にできる事なら何でも所望して下さいと云うと氏郷は、それでは只今御座敷へ来る時見かけた色が真黒な老人で朱鞆の大脇差を指して居る者は何者でしょうか、今時珍しい容貌ですが私の家来にして今度の入国の記念に連れて行きたいのですが、お許しなら何よりもありがたいと云った。

家康公はこれを聞くと、是はたいへんお安い御用で、すぐにでも進呈と言いたいところですが、あの老人は若い時に武田信玄の家老、板垣信形と云う者の雑用をしていた男で全く筋目も無い者です、その信形の倅、弥次郎と云う者が信玄に対して奉公を行わず、外にも色々悪事を行った為信玄から成敗されました。その時あの老人は曲渕庄左衛門と云う侍でその弥次郎に奉公していたが、主の弥次郎を殺したからには主の仇であるから是非とも信玄を打殺そう、と狙い廻した程の無分別者であり、その上御覧の通りの老人ですから、召使われても何の役にも立たないでしょう、この事だけは幾重にも御断りしたいと答えた。氏郷は、筋目も分別も少しも構いません、勿論年寄である事も結構です、しかし特別に御寵愛されていると見受けまますのそれでもとは云いません、兼々承っている曲渕ですからせめてその知人となり少々昔物語など承りたいものです、と云う事で曲渕が座へ呼ばれ、信玄・勝頼二代の間、所々の合戦物語を数時間申上げたと言う。

註1 蒲生氏郷 (1556 - 1595) 織田信長家臣、後秀吉に仕え、天正十八年 (家康の関東拝領と同時期) 会津の守護となる。 後病死

第三十七話 太閤秀吉他界後の体制

太閤秀吉の病気が快復しそうも無く子息秀頼は未だ幼少であり、他界後の天下が心配であり、室町時代の足利家を習って家康公、前田利家、毛利輝元、上杉景勝、宇喜田秀家を五大老と定め、天下の政治は大小問わずこの五人に任せた。次に生駒雅楽頭、中村式部、堀尾帯刀を三中老と定め、五大老と五奉行との中に立って万事に宜しく相談に乗る様にすべしとした。

それから又浅野弾正、増田右衛門尉、石田治部少輔、長束大蔵、徳善院玄以法印の五奉行は秀吉が在世時と同じく、私心を放れて秀頼の為を思つて支配すべし、もつとも軽少の事は各々相談して解決をし、重大な事になれば五大老の面々へ尋ねて指図を受け、若し又指図通りにはしては悪く

なると思えば三中老達にも相談してそれを大老の面々へ報告して巧く行く様にすべし。五奉行の者達は大老と直に事を争って理非を論じたり、差図を非難して逆らってはいけない、勿論五奉行の仲間内で自分を主張しお互いの仲が悪くなれば天下が乱れる元になると考え、神文を取り交わし心一つにして秀頼を守り立てるべしと堅く遺言があり慶長三年八月十八日終に他界となった。

大谷形部少輔はそれまで五奉行に列していたが眼病のため職を去り加判に入らなかった。然しながら太閤時代には筆頭であり、万の事を知り有能と人々に言われ、特に石田や長束等を初め、大谷の推薦で秀吉公に奉公した者も多く、その上大老衆へも親しく、昼夜の会合に参加するので諸人が敬い五奉行も及ばなかった。中でも家康公に對しては特別に熱心に出入するので、家中でも他家でもたいへん親しい関係と想っていたが、大の諂い上手で上には良い様に見えても心根は妬ましく、又石田と親しい様子も変わらないので本音は如何かと家康公自身は疑問を持っていた。

浅野弾正には太閤時代より家康公は表向の諸事の用を頼み、私的にも親しく今でもなお入魂であった。又奥向の事は尼の香(孝)蔵主が家康公の事を大切に思っていた。

従って五奉行仲間では弾正に各人は気を付け、奥向では香蔵主を氣遣っていた。このために石田以下の者達は様々の手段で家康公と弾正の關係が悪くなる様に計画を廻らす、家康公は前からこの事を察して居り、弾正も当然ながら分っているので少しも油断はなかった。然しながらお互いに親しい様子では反って良くないので太閤他界後は家康公も弾正に兼ねてからの恨みが有る様に見せ、弾正も疎んじる様にしていた。併し外様大名の細川越中守、中老の堀尾帯刀がその中に立って彼方此方と情報をもたらすので、五奉行仲間の事は大小となく家康公の耳に達していたがその事を人々は知らなかった。

又香蔵主は秀忠公が特別に同情し、後は江戸の御城で採用されて三河岸に居屋敷まで下さった、その上香蔵主の子、川副六兵衛と云者は、信長公に奉公した川副式部の惣領であるが大御番に採用された。これは香蔵主の退職の代わりと云う事だたいへん大切にされた

註1 香(孝)蔵主(?-1626) 高台院(秀吉本妻)付の筆頭上臈で奥向を
取り仕切った。一生未婚で甥の川副六兵衛を養子とした

第三十八話 家康公石田の危難を救う

慶長四年(1599)の春大坂にて池田三左衛門輝政、福島左衛門太夫正則、

細川越中守忠興、浅野左京大夫幸長、黒田甲斐守長政、加藤左馬助喜明、加藤肥後守清正等の面々が集まり相談し、石田三成を打果して日頃の恨みを晴らし、今後の悪人の見せしめにとしようと計画し、この事を密に家康公に伺った。家康公は決してやっつてはいけなさと説いた。石田もこの企てを聞いて出仕を止めて用心していたが、相手が大勢なので今後どうしたものかと困っていた。そこで佐竹右京大夫義宜が伏見でこの事を聞き、三成と仲が良かったので夜中に大坂に下り三成宅へ行、今度の事は理を非に曲げて家康公に頼込なければ解決出来ないだろうと意見して宇喜田秀家に留守中の事を頼み、夜に紛れて女乗物に乗って伏見へ上り、今度の危難をお救い下さいとお願いをした。

家中の人々は兼てから三成が悪意もって家康公の仇である事を知っている、是はもつつけの幸、三成が成敗されれば以後の災が無くなるのと口々に云う。その夜本多佐渡守が登城して、御夜話は終ったかなと尋ねると土井大炊頭がその頃甚三郎と云う児姓だったが、今少し前に御寝所へ入られましたと云う。佐渡守は少しご意見を得たい事がある、ので登城しました申上げてくれとの事で甚三郎は取次いだ。家康公は未だ起きており、参れとの上意で佐渡守が傍により、今宵は何時より早くお休みですねと申上げると家康公は、其方の夜中の出仕は何事かと尋ねた。佐渡守は、いや別の事では御座いませんが石田治部はどうされますかと申上げれば家康公は、実はその事を今も色々思案しているぞとの上意だった。佐渡守は、それを聞き安心しました、御思案されると仰られる以上申上げる事は御座いませんと云って直ちに御前を退出した。

その翌日家康公は大坂へ使者を送り、例の大名達を説得したが、彼等は同意せず、既にここに至っては元の状態に戻す事は困難です、皆の希望通り石田の成敗を命じて下されば本望です、その上悪人ですから天下の政治の為にもなりますと一同が答えた。家康公は重ねて述べた事は、石田の悪意は各位へ対してだけでは無く家康へも同じである、然しながら故太閤に取立られた者であり、その上この度は各位に責められ身の置場がないため家康を頼りに来た者を、日頃不快の者だからと云って見捨てる訳には行かない、この度の事は家康に免じてお頼みしたい、それでも同意できないという事であれば、家康の身上に代えても三成は引渡さないと口上で述べ、とりわけ池田輝政は縁者の甲斐も無いと不満を述べた。

これにより諸大名も異議も無くなり、そのようにお考えならともかく元の方針通り石田の奉行職を停止して江州佐和山に蟄居すべしという事で決着がついた。

所が諸大名が夜に伏見の屋敷へ大坂より人数を揃えて押し掛けるとの風説があり、その上夜になって城の櫓へ上れば何処からともなく大量の火縄の匂がしていた。これでは石田の手勢だけで佐和山に帰る事は難しいと家康公は考え、三河守秀康郷を添へて瀬田の大橋まで送らせた。石田の家来大庭土佐守、その他大勢が佐和山から迎えに来ていたのでその者達へ三成を引渡し秀康公は瀬田より帰った。その時秀康公は柴田左近と云者に佐和山まで見送る様にと指示した。

著者註 この三成を保護した事について、世間では家康公の考えは成敗する積りだったが、佐渡守が強く意見したので助命したと云うが、これは間違いである。後に石谷将監が土井大炊頭にこの時の次第を尋ねたところ大炊頭は前述の様に物語った由

第三十九話 大坂城にて家康公暗殺計画

慶長四年（1599）九月八日家康公は大坂城西の丸に入り、秀頼への対面の為本丸へ行く予定だったが、増田・長束以下の者達が家康公を殺害しようとする企が有った。浅野弾正も表向きは企ての一味の中に居り、家康公が登城する時刻に通常通り弾正一人が迎に出て、先に立って書院へ案内するため廊下を通る時、土方勘兵衛が抱き留めて大野修理が小脇指で突く打ち合わせである。この計画を弾正方より長岡越中に告げられたので長岡は急いで西の丸へ参上して密に申上げ、明日の御出仕は中止なさるべきとした。家康公は、その様な事を知った上はその心得をしよう、登城は中止しないと云った。

さて翌日朝になり登城に際し、本多中務・牧野右馬充等を先頭に立てた屈強な侍大将十二人は家康公が着座する座敷の次の間まで同道する手筈で、他に使番衆五人は本丸玄関までと云う事で以上十七人をお供として召連れ、桜の門の番人が御供衆が多いと言ったが誰も聞き入れなかった。

さて玄関へ弾正がお迎えに出て挨拶を申上げ、例の様に先へ立って上り、家康公は例の御供衆を召連れ座鋪へ通り、その威勢に辟易して事前の計画と違い土方も大野もお目通りにさえも出られない。秀頼公と対顔する座鋪の次の間には定められた通り御供衆が列座しているので指を指す事も出来ない。家康公は、秀頼公はたいへん成長して元氣そうでたいへん目出度、家康一人の悦びですと淀殿へも口上を述べ、盃の交換も済みやがて立上った。五奉行が全員見送りに出て御訪問を悦んでいる旨を述べ、早刻秀頼郷から使者があり、淀殿からも御礼があった。その日に大坂を出発し伏見へ帰った。

この家康公の登城に際し大勢の家来達が付き纏い、特に秀頼郷が対面する次の間まで推参した事は如何にも理由があり、若し理由が無いのにあの様な事であれば太閤の遺言に背き、幼少の秀頼を侮るものであり、やり方が

家康らしくないと淀殿はたいへんな立腹で五奉行の面々へ穿鑿があつた。各奉行が困っていると弾正が、この事は最後まで隠し通す事は出来ないと思う、そうなると五奉行の中一人も残れない事になる、それでは秀頼郷の為になる者が外には無いので皆は知らない事にし、拙者一人が罪を被り、どの様な処置になつても止むを得ないと相談して淀殿へ申入れた。淀殿はそれを聞き、それは秀頼を大切に思うのでは無く天下の大乱を招くやり方である、故太閤御他界から未だ三年も過ぎないのにその様な企てはとんでも無い事であると伏見へも急いで使者を送り、弾正の不届の様子を詳しく報告し、どんな罰でも与えられる様との事だつた。家康公は、淀殿のお気持ちには満足です、併し弾正等は故太閤から浅からぬ恩を受けた者であり、私を亡き者にすれば秀頼の為になるであらうという積りで、その様な悪事を企てた事でしょう。智恵の無い者とは思いますが、それ程の科人とも云えません、謀叛や逆心等とは違いますので此方でも吟味して相当の咎を行いましうと返答した。

その後弾正は甲州の知行所へ、土方は常州水戸へ、大野は武州岩付へと夫々蟄居が仰付られた。弾正が云うには、土方大野兩人共に他国に流され、拙者一人は倅の領知に居住するのは自由の俣であり憚り多いとの事で武州の府中に庵を設けて不自由な暮をしていた。

秀忠公が武州野辺に鷹狩に出かけた時などは使者を送り、獲物の鳥や菓子などを贈り交際した。後々は江戸の御城へも招かれ懇意浅からず弾正も忝き次第に思っていた。

弾正には男子が三人あり惣領の左京太夫は家督を継ぎ甲斐の国守だつた。次男但馬守はその頃宇兵衛と云い、秀頼郷の小姓組だったが京都大政所に勤務していた。三男采女正と云い、この様に子供が多いので何れにも知行は必要であろうと、家康公領内の常州笠間の城に五万石の領知を添へて弾正の隠居領として下さつた。左京太夫は三十八歳で死去し男子が無かつたので弟但馬守が兄の家督を継いだ。従つて笠間五万石は三男采女へ渡り、以後今日に至るまでこの浅野家は譜代として勤めている。

註1 江戸時代中期、忠臣蔵で有名な浅野内匠頭長矩は浅野采女正の系統。

この家は江戸初期に笠間から播州赤穂へ所替となっている。
註2 第三巻の内容もほぼ落穂集前編に含まれている。

岩淵夜話別集第四卷

- 第四十話 関東へ下向、長束へ脇差を贈る
- 第四一話 石田反旗と小山会議
- 第四二話 堀尾帯刀の事
- 第四三話 美濃の大柿奪い取り
- 第四四話 関ヶ原の勝利、勝鬨は延引
- 第四五話 福島正則の事
- 第四六話 石田三成の生捕り
- 第四七話 福島家の三家老
- 第四八話 三河守秀康の腫物
- 第四九話 山内一豊の土佐拝領
- 第五十話 大野修理の本領安堵
- 第五一話 山名禪高の羽織
- 第五二話 駿府城常見の香の物
- 第五三話 大仏より真直ぐな政治
- 第五四話 主人の悪事を諫める事

第四十話 家康公、長束大蔵に脇差を贈る

慶長五年（1600）上杉景勝を退治するため、六月十八日家康公は伏見を出発し、大津の城では京極宰相が食事を献上した。その晩は石部に旅宿し、翌日は水口で城主長束大蔵少輔が食事を献上するので迎えの為大蔵父子が石部まで伺公した。そこで明朝には水口に入る旨伝えたので長束は悦んで水口へ帰った。ところがその夜八時頃急に石部を出立し水口辺を夜中を通り過ぎ長束方へは使者を立てた。これ迄立ち寄る予定だったが急用の為急いで通り過ぎます、たいへん残念ですとの口上で来国光の脇指が贈られた。長束は仰天して使者と連れ立って土山まで参上して、道具拝領の礼を申上げて帰った

註1 京極宰相（高次 1563 - 1609）妹は秀吉側室、妻は淀の妹、関が原では東軍に属し大津竈城戦で多くの部下を失い出家するが、家康に高く評価され、若狭小浜八万五千石を与えられる

註2 来国光 鎌倉時代末期から南北朝時代にかけての京都の刀工、刀、短刀などが国宝に指定されている（九州国立博物館）

第四十一話 小山本陣へ石田謀叛の注進

家康公が関東へ下向した後跡に石田治部少輔は佐和山より大坂へ出て、諸大名を誘い謀叛を企む由、諸方の注進が小山の陣所へ聞こえてきた。旗本の諸人はこれを聞き、東国の上杉だけでも簡単な敵ではないのに今度は又石田が謀叛するに至っては、前から一味の諸大名も多いので

家康公一人の身に迫る由々しき大事であると氣遣いをするが、家康公は少しも苦勞に思う様子も見えず、何時もの様に御機嫌で秀忠公の宇都宮の陣所へこの旨を伝えさせた。

さてこの度の御供をして下向した上方の大名は残らず小山の陣所へ招待してもてなしがあった。井伊兵部少輔と本多の兩人を通じて各大名に発表された事は、石田以下の凶徒が逆乱を企てた事はやむを得ない、各位は妻子を大坂に残して居られるので心配に思われるでしょうから勝手に上られて結構です。又凶徒の一味と親しく共に行動しようと思われる方々はこれも結構です。戦いの事は夫々理由があるものですから、今日は味方、明日は敵となる事も古今珍しい事ではありません、少しも遺恨はありません、という口上が述べられた。

列座の大名達が口を閉じている時に福島左衛門太夫が進み出て、他の人はともかく拙者は全く二心は持ちません、家康公が出馬されるのであれば清須の城を明渡ししましょう。弾薬や兵糧もそれなりに日頃から蓄えておりますからお役に立つはずです、と云うと一座の大名一同も私も同じですと申上げた。井伊・本多がこの旨を家康公に報告した。重ねて山岡道阿弥と岡江雪を通じて、只今各位が申上げた通りを聞かれ非常に満足しておられます、それでは景勝を急いで退治すべきか、それとも先に上方の凶徒等を征伐すべきか、この旨各位相談して遠慮無く申上げて下さいとの事である。

福島左衛門・黒田甲斐守兩人が一座の家老中へも相談して、先ず上方を退治なさるべきと答えた。山内対馬守は掛川の城を明渡すので人数を入れて安心して上洛して下さい、また自分の人質は吉田の城へ差上げますとの事である。これによって海道筋の諸城主が同様の趣旨を申上げる事になった。

又大坂騒動の注進は方々より有ったが中でも山内対馬守の内室からは侍を飛脚に仕立てて送ったので、諸方の注進よりも早々に到着したものを早速に言上し、その上全く別心を考えない旨を一番に申上げたので家康公はたいへん満足した。だからこそ関ヶ原一戦勝利後の上方大名への御褒美の時、内容が他に異なつたのであると云う

註1 岡江雪（岡野融成 1535 - 1609）北条家臣、其後秀吉、家康に属す、

出家名 江雪斎

第四十二話 堀尾帯刀の事

三河国池鯉鮒の宿で堀尾帯刀は、加賀井弥八郎が水野宗兵衛を討果したので、帯刀が相手をして即座に弥八郎を切り殺した。この噂が正確な報告が

無い内に上方より馳せ下って来る方々の飛脚が聞き伝えて小山・宇都宮の陣所で広まった。

この事から風説では堀尾帯刀が石田と志を通じて加賀井と共に水野を説得したが水野は家康公の第一の味方であるため同意せず、その為にこの様になったのだと云う。

一方堀尾信濃守はこの陣に御供しているので父子の間での内通も有るかも知れない、既に事が明らかになっているので信濃守は逃れられないが今はどんな気持ちかと周囲では囁いていた。

井伊兵部と本多中務の兩人は相談して本陣へ行き密かにこの旨を言上して、事態がはつきりするまで信濃守の陣屋を兩人の家来達に取巻かせましようかと伺ったところ、家康公は暫く思索した後言った事は、喧嘩した事はない、ありそうな事だ、しかし帯刀は私に気を遣っており上方へ通ずる事はない、間違いない。今日中には確かな情報が来るだろう、それまでの間は少しでも信濃守を疑ってはならぬ、との上意なので兩人は御前を引き下がった所、この喧嘩の経緯を詳しく言上する飛脚が到着して内容が明らかとなった。井伊、本多は後々までこの事を語り、家康公は実に良く人を見る目をお持ちだと感心した。

註1 池鯉鮒ノ駅 池鯉鮒宿（ちりゅうじゅく）現在の愛知県知立市

註2 堀尾帯刀（吉晴 1544 - 1611）秀吉の武将、浜松十二万石、関ヶ原では東軍に属し、戦後出雲二四万石

註3 加賀井弥八郎（重望 1561 - 1600）美濃加賀井城主、石田派。宴席で口論の末水野を殺害、堀尾に切られる

註3 水野宗兵衛（忠重 1541 - 1600）三河刈谷城主、

第四十三話 美濃の大柿奪い取り

八月廿三日に美濃国岐阜城を攻め落としたと前線の諸将からの注進の知らせが同月晦日に到着した。九月朔日に江戸を出発して関ヶ原への行程の途中、岐阜の近所にある八丈村瑞雲寺と云う小さな寺で一休みの時、この住寺が大きな柿を盆に積みもてなしをした。家康公はこれを見て御側まで召寄せ、是は住寺の心づくしがこもっていると言い、御供の児小姓衆を残らず呼び、これが有名な美濃の大柿である、其方達で我勝ちにバイドリをせぬかと盆ごと座鋪へ移させ、皆が奪い取るのを見てたいへん御機嫌で、有名な美濃の大柿も児姓共が我勝ちに奪い取り解決したと上意であった。

註1 バイドリ 我勝ちに奪い取る事（広辞苑）

第四十四話 関ヶ原の勝利、勝鬨の延引

九月十五日関ヶ原合戦が勝利に終り、凶徒は全て敗れ散ったので家康公は実見山へ上り、兜を持参する様にとの事で皆不思議に思っていると、頭巾を取り兜を召し、勝つて 甲の緒を締めると云うのはこの時であると上意があった。そこで前線の諸将が参列して祝義を申し上げ家康公も、各々方も粉骨尽された事悦び浅からぬ旨を述べた。

そこへ松平下野守殿が軽傷を二ヶ所負い御目見し、井伊兵部少輔も鉄砲傷を負い腕を括つて首に掛け、同じく御前へ出て下野守殿自身が手柄をたてた様子を言上して、やはり逸物の鷹（家康）の子は逸物と見えますと申上げれば家康公は、上手な鷹師（兵部少）が付いてこそであると云い、非常に御機嫌で下野守殿へも兵部少輔にも直接に菓を下さった。

山岡道阿弥が参上して、誠に夜が明けた様です、勝鬨を行われるべきですと申上げれば家康公は、何時でも日の出の合戦はこの様なものである、まだ安心できないのは諸大名の妻子が皆大坂に居る事である、すぐに上洛して妻子を各人に引渡した上で勝鬨は行うべしとの上意があり、道阿弥を始め御前伺公の諸大名は各々鎧の袖に感涙を注いだと云う

註1 松平下野守（忠吉 1580-1607）家康四男、秀忠の同母弟、井伊直政の娘婿

第四十五話 福島正則の事

関が原近くの永原の陣所で家康公近藤登之助・伊奈図書・加藤源太郎の三人を召して、今度の戦が決着した上はこの先遮る物が無いとて各軍勢が妄りに上京して狼藉等を犯す事も有り得るので、その旨各軍勢に注意してはいるが猶念を入れ各々を指名するので大津へ行き、日の岡に番所を設けて往来の人を改めた上で通すべしと指示があり、三人は畏まつてその様に勤めた。

そこで福島左衛門太夫の使者の侍が番所の前を通る時に突然口論となり、番人の足軽達が棒で使者を叩こうとして棒の先が使者の侍に当たったのでこの為堪えがたいとして、其の場より使いを返して福島陣所へ遣わして事の次第を報告し、即座に討果そうとしましたが天下の関所ですから理不尽の問題になるのもどうかと思い我慢しました、某は間違った事は少しも有りませんがこの様な結果になったのは力が無かったからですと言つて切腹をする時、相手は伊奈図書ですと云つて死んだ。

左衛門は是を聞いて色々抗議を入れて来た。家康公は未だ御存知にならない事だと関係者が相談した意見として、番人が何人居ようと相手をして我慢すべきであると云つたが正則は承知しない。そこで

家康公より図書に切腹を仰付られた。

正則はこの度各軍勢の中でも抜きん出て功績が有ったとは云え、その功に誇ったやり方だと皆の評判となった。勿論家康公も心外に思われた様だが、関が原の勝利直後で残党が未だ諸国に有って静謐にはなっておらず、しかも凶徒の張本人である石田や小西等の行方も判らぬ時節であるので、やはり遠慮なされたかと思う人々も有ったと云う。

その後上方諸大名へ恩賞を与えられる時も安芸と備後両国を正則に割当られ忝い事だと思われていた。ある人がこの事を井伊兵部少輔へ尋ねたところ直政の答は、福島は天下の為に大きな手柄を立てた人である、なんと云っても図書は家康の御家人であるのでこの様にせざるを得なかった、そうは云っても誰でも一生間違いが無いとは限らないので、今度大国の拝領を仰付られ近づきになればそれだけ福島は今後の行動が大事であると云ったという。その通りとなり秀忠公の代になってから正則は規則に違反してお詫びのしようも無かったと聞く、当に直政の金言の通りである。

註1 福島正則 (1561-1624) 安芸・備後四十九万八千石、広島城の無断

改築を行った事で武家諸法度に違反したとして1619年に改易となった

第四十六話 石田三成の生捕り

九月廿三日田中兵部少輔の手勢が石田三成を生捕り、大津の旅館へ連行して来た。家康公がその経緯を尋ねたところ、関が原で西軍が散った後伊吹山の険路を越えて草津辺へ出ようとしたが途中で腹痛になり、樵(きこり)の身形に替えて破れ衣を着て、腰には鎌を挟んで岩穴の中で伏せていたところを搦(からめ)取った由報告があった。その時御前に伺公して居た人々は、大謀叛人として何処へ逃げようと思ったのでしょうか、左様な見苦しい身形に替えてたいへん未練の男ですと申し上げたところ家康公より、命を全くしてこそ事の目的を遂げるのであるから、望があれば一日の命も大切である、未練と云う事ではない、早く衣服を与えて肌を温めさせよ、食事を進め病気なら医者に見させ養生させよ、万事不自由させぬ様にと指示があった。当分は本多上野介の陣屋に置様にとの指示だったが、鳥居久五郎にとっては父の仇であるからと、翌日から鳥居方へ預けさせたと云う。

註1 鳥居久五郎 (成次 1570 - 1631) 伏見城で石田一味に攻められ討死した

鳥居元忠の三男、この時三成を預かる間武士道に随い丁重に扱ったという

第四十七話 福島家の三家老

福島左衛門太夫正則は安芸・備後の両国を拝領して入国のお礼に上った時、家老三人の者達も御目見えが許された。

一番にお礼に出たのは備後寒鍋の城主福島丹後でこの人はびっこであった。

次に備後三好積山の城主尾関石見で、この人は三ツ口だった。三番目は備後東城の城主で長尾隼人、この人は片目だけが光っていた。家康公の後に並んで座っていた小姓衆の中で我慢できずに笑い出す者がいた。

この御礼の挨拶が済んだ後、家康公は小姓達の方を向き、たいへん立腹して、今福島の家老達を見て笑ったのは何事か、三人が共に片輪者であるためおかしく思つて笑つたに違いない、人は誰でも何時、如何様な支障が起こり、五体が不具になるか解からないものである。その上でも今の三人は皆戦いの経験が豊富で勇ましい武士であるからこそ、福島の家中でも出世をして撰ばれて家老にまでなり、こうして家康の前へ出て礼を述べられると云う事は武士の誉である。若者にとつても羨ましく自分もあやかりたい気持ちがあればおかしき事など無いのに、何とも思わぬ考えだから今の様な笑いが出ると思うぞ、そんな心構えでは成人しても世間で通用する事は難しい、一般に武士は思いもしない片輪者になる事も納得しなければ奉公はできないぞ、よくよく考えて見よと云われ、二三日の間機嫌が悪かつたと云う。

註1 この挿話は岩淵夜話だけである

第四十八話 三河守の腫れ物

三河守秀康郷は若い時、腫物の病気で久しく引込んで養生していたが、快気したので病後のお礼として登城する事になった。

家康公もたいへん悦んでもてなしの用意を指示し、当日になり三河守殿が登城した。家康公は傍衆を呼び、秀康の面相は以前の通りかとお尋ねがあり、特に替つた事は御座いませんと申し上げたところ、鼻の形も替つていないかと重ねてお尋ねがあり、お鼻の形もいつもの通りで御座います、唯お痛みなのか薬を付けて居られますと申し上げると、急に家康公は不機嫌となり家老衆を呼出して、三河守は久しく病気であり元通り快復して今日登城する事は私にとつてもたいへん満足だった、そのため皆も知つている様に十分にもてなしをしようと思ひ猿樂まで用意した、ところが私の心に納得できぬ事があるので対面はしないので直ちに退出させよとあつた。

家老一同は色々お詫びごとを申上げたが、中々聞入れられず強く立腹されてるので、仕方なく上意の趣を秀康郷に申上げれば非常に困惑されたが、当座に好転は難しい様子なのでその日は退出した。旗本衆上下はこの事実だけで、誰一人その理由を知っている者はなかつた。三河守殿もたいへん気にしてお目見えを是非とお願いしたが家康公は、私も久しく対面していないので一時も早く逢いたいと思うが、再度と云つても先日の様な勿体を付けて登城するのであれば逢う事は出来ないとの上意であつた。

皆は、それは如何様の事でしょうか、いま少しお話を承れば秀康公へご意見を申上げられるのですが、といえば家康公は、いやいや、何事の異見と云程の事でもないが、秀康が今度の病気で鼻が変形して見苦しいとの事は私も既に聞いていた事である、ところが先日登城の際に鼻の形が良く見える様にと薬を付けたと聞いた、腫物が治ったのであれば薬を付ける必要はない、鼻の変形を隠そうとして貼付薬を使う事は三河守らしくない、一般に美男を好むのは公家か町人の事である、形が醜い事を気遣う必要は全くない、人間の病気には色々あり、目玉の抜け出る事、口の歪む事、手足の指が萎縮する事もある、是等は全て病気であるから、どんなに見苦しくても少しも恥ではない。

そこで家康の子に生れ三河守と呼ばれ、一軍の大將を勤める者が鼻の形が醜いなどを気にして、張薬を付けて見栄え良くするのは以ての外で汚い心である。一般に大將が好む事は家中やその家来達まで聞き伝えて真似するものであるから、ちよつとした事でも人の上に立つ者は気をつけねばならない、秀康のやり方を家康も尤と思つてか、見ぬふりして気持ちよく対面を遂げたと旗本達の蔑みもあると思ひ急に対面を止めたのである、この旨をよくよく三河守に言い聞かせよとの事で次の面会の日時も決められた。

秀康郷も一入（ひとしお）忝く思ひ登城したところ、前に支度された以上のもてなしで秘蔵の道具等もいろいろ与えられた。

註1 この挿話は岩淵夜話だけである

第四十九話 山内一豊土佐一国拝領の事

山内対馬守は土佐の国全体を拝領して、入国後のお礼の為大坂へ上り西の丸へ登城すると家康公は面会して万の物語をして、土佐の国は何拾万石程とご存知かと尋ねた。対馬守は、この度は在国の間も十分無かったので、家来に色々指示致しまして領分の概略を報告させました、地元を良く知る家来が申しますには貳拾万石内外有るはずとの事でしたと答えると家康公は手を打って、それは予想以上です、太閤の時代に伏見で長曾我部元親が登城する時、その体裁などから見て十五万石以下の身上ではできないと皆が思っていた事です、従つて土佐の国は海も渡らねばならないし大変だが貴殿にと考えていたものですとの上意だった。

対馬守は承つて、只今の上意の事は私の身に余るものであり、子々孫々に至る迄伝えて忝く思うもので御座いますとお礼を言い、感涙を押えて御前を立った。この上意を伝え聞いた人々は、山内はこの度それ程の軍功もないのに遠州掛川六万石から土佐一国の主を仰付られた事でさえも福島や池田等の諸家以上だと思われていたところに、今日の上意を聞き、よくよくお考えに叶った事があつたのだらうと評判になった。

註1 山内対馬守 (一豊1546-1605)関が原の一戦の前下野国小山での会議で
真先に城も全て家康に献上して味方する事を表明し、そのため他の大名達
も追従せざるを得ず家康勝利の原因を作ったといわれている。

第五十話 大野修理の本領安堵

関が原の一戦後、土方勘兵衛雄久と大野修理兩人にも元の領地を安堵する事を
発表された。この兩人は以前に家康公が伏見の御城より大坂へ来城した時、
五奉行の指示を受けて家康公殺害を実行しようとした連中なので、幾らこの度
味方として奉公したとしても前の罪が重いので一命を助け置かれるだけでも
大変な御慈悲であり、本領安堵迄は許されるべきでないと思われ、密に申上た人もあった。

其時の家康公の上意は、其方が云う事も一理は有るけれど、この兩人は五奉行の
指示で家康さえ殺せば秀頼の為になると一筋に思い入れての事である、故に私に
とってこそ敵であつても、秀頼にとっては忠義の者である、特に今度の戦で修理は
安中より出て浅野左京太夫と共に岐阜の城を攻めたが、関が原合戦の時には石田に
向かつて人よりも先に矢を射掛けたくて、浅野に了解を得て先手の
福島部隊に参加し、自身で河内七郎左衛門を討取った。
土方についても早々に水戸より出て私の使いとして加賀に行き、
前田利長と協力して味方の有利となる様取計らった、これも又立派な
働きである、過去の悪事を問わないのが良く、まして過去に大坂城中で
家康を襲う計画も秀頼の為に誤った事であり悪事とも云えない、
そのような理由でこの度の恩賞から外す理由は無いとあつた。

第五十一話 山名禪高の羽織

ある時山名禪高が確かに古い羽織で所々破れたものを着用して、御前へ
出たので家康公が、禪高その羽織はと聞くと禪高は承つて、この羽織は
万松院義晴公から拝領致しましたものですと答えるのを家康公は聞き、
さすが山名殿、感心なものと思ひ大変感銘を受けた。

註1 山名豊国、号禪高(1548-1626) 山名豊定の子 戦国時代武将で

秀吉の御伽衆、後家康に属し1601年但馬国に6700石、交代寄合

註2 万松院 足利義晴(1511-1550) 室町十二代將軍在位1521-1548

第五十二話 台所役人常見の香物

家康公が駿府在城の頃、台所の全てを任された役人に常見と云う人がいた。
ある時奥向に勤める女達が集まって話している中で、こんなに何もかも
塩辛くては困った事よ、いつになったら気持ちよく口に合う物を食べられる
事やらと囁き合っているのを家康公に物越に聞こえた。そこでその女中を
呼んで、今其方達が言っているのは何の事かと尋ねると、いや大した事では

ありません、御台所より出され私達に下される物の事ですと申し上げた。それはどの様な事かと尋ねるが誰も言い兼ねているので、更に追求すると幹部女中が申上げ、近頃の事では御座いませぬが以前より出されます味噌や漬物がたいへん塩辛いのです、私達の様な年配の者でも食べにくいものですから若い人達は一口も食べられない様な状態でございます、私からも賄いの常見へ度々申し入れておりますが聞いてくれませぬ、その事について今隣の部屋で話し合い、常見は強情な事よ、と皆で笑っていたものと答えた。

家康公は、確かに皆が困っているのも理由がある、今後はそのような事がない様にしてやろうと云い表の間へ行き常見を呼んで、台所から出される味噌や香物等が塩辛すぎて奥の女達が出来ないで困っているようだが、今後その様な事が無いようにとの上意を常見は謹んで聞いた上で、脇指を外して御側近くへ寄り耳元に口を近づけ何やら暫く囁いていた。家康公も笑いながら頷き、彼は云われる事もなく常見は御前を立去った。

御前近くにいた人々には何事を申し上げたのか想像も出来ず、暫くしてある人が常見にその時の事を尋ねたら常見は答えて、大した事ではありません、女達は一般に食欲旺盛です、今のまま塩辛くしてさへ大量の味噌や香物が必要ですが、上意の通りに塩加減を良くして食べさせたらどんなに沢山食べるか想像も付きませぬ。そうなると年間にしたら大変な出費となりますから、今後女達が内々に申上げる訴えなどお聞きにならないようにと申上げただけですと常見は語った。

今駿府の城中に常見蔵と云う蔵があるのは常見が預かっていた蔵の名であると伝えられている

註1 この挿話は友山の駿河土産にもあるが、役人名が常慶となっている

第五十三話 大仏よりも真直ぐな政治

ある時家康公の御前で山岡道阿弥と前羽半入等が意見として、天下を治められる方は末世迄お名前が残る様になされるのも当然と思えます、太閤秀吉公は都の内に大仏殿を建立されたのでお名前は何時までも残ると思われますと申上げた。

家康公はそれに対し、確かに皆の言われる通り大仏殿は末世に残る太閤の名誉である、しかしながら家康はなにも構わない、私の後においても天下が二代或いは三代と替らぬ国風で真直ぐな政治が残るように工夫や思案するのが大仏を何体も建立するより遙に勝るものと思うぞと上意があった。

註1 山岡道阿弥 (1540-1603)三井寺僧だったが還俗し、足利義昭、

信長に仕える。信長死後剃髪して秀吉の御伽衆、以後関が原では

家康に付き甲賀衆の総帥として尽す、戦後九千石

第五十四話 主人の悪事を諫める事

駿府の城で家康公が咄衆へ上意有った事は、一般に主人の悪事を見て諫言をする家老は、戦場で一番鎗を突き入れるよりも遙に勝れた心掛であると思う、その理由は敵に向かったら勇敢に戦い自分の命を庇ってはいけない事である、しかし勝負は時の運次第であり相手を討つこともあれば、相手に討たれる事もある、仮令討死を遂げても末代まで名を残し、主人にも惜しまれれば死んでも本望である、運良く相手を討てば勇者としての名を挙げ主人にも悦ばれ、その上恩賞を得て家も富み子孫繁栄の元にもなるので戦場での働きは死んでも生きても損にはならないものである。

ところが主人の悪逆不道に逆らって強く諫言をする時は、十のうち九ツ半までは危険な勝負である、理由は主人が悪事を好む時の心は逆に善事を嫌う、このために昔の人も、良薬は口に苦く金言は耳に逆らうと云った様に、主人の悪事を見逃しにせずに異見を云う家老は疎んぜられ、自分の傍には近づけぬようにするものである、そうすると主人に諂い、追従を云う連中が申し合わせてその家老のアラを探し、折りに触れ讒言する、主人はそれを真実と思ひ益々心を隔て面会もしなくなる。

そうなると大抵の者は残念に思い、主人を見限り見放す気持ちになり、それ以上は用心の為意見する事を止めるか、仮病を使い引籠り隠居を願ったりして物事にこだわらず過ごすものが十人中八人か九人である。それに反して主人の機嫌が悪いのにも構わず、一家の長としての道を守って、主人を諫めなければ自分の責任と思ひ込み、何もかも忘れ、幾度も幾度も烈しく諫める様な家老の場合、最後には主人による手討に逢うか、又は押籠られて身上や命まで失い、妻子までも苦労させる事は明らかである。この事から考えて見れば戦場の一番鎗は却って簡単な事では無いかとの上意だった。

これに関連して家康公が浜松に在城の頃、ある夜本多佐渡守其外三人が用事で御前へ召出された時、中の一人が鼻紙袋を開け一通の書付を取出して封を切って自分自身で御前へ持参して差上げた。家康公は、夫は何かと尋ねると、以前よりずっと私が考えていた事などを書付けて置いたものです、憚りではございますが、御前の参考にもなるかと思ひ差しあげる物ですと申上げた。それはそれは感心な心掛けだなと云い、佐渡守よ、遠慮なくここで読んで聞かせよとの事なので、畏りましたと云って数ヶ条の書付を読み通した。一ヶ条読み終わる度にもっともな事と相づちを打ち、是に限らず今後も思う事があれば遠慮なく聞かせよと

上意があった。御聞届け戴きました事忝い事ですと其人は額づき、用事も済んだので御前を去った。

佐渡守は他の用もあり後に残って居たが、家康公は、今の者が読聞かせた書付に付いて如何思ふかと尋ねると佐渡守は、一条として御前のお役に立つものは無いと思ひますと申上げた。家康公は手を振り、いやいや、あれはあの者の考えを精一杯書付たもので氣を使わずに良い、私も心からなるほどと思う事は無いが、普段から考えていた事を文書に調べ懐に納めて置き、機会を見て私に見せようと思う心掛けは感心な事である、その内容が役に立てば使うし役に立たねば使わないだけである。

一般に自分自身では間違つていても分らないものである、しかし小身の者は親しい友達や傍輩学友などがあり、互いに悪事があればけん制するので、自分の悪事を人に言われて改める事が多いものである、是は小身の者の得になる所である。一方大身の者は皆それぞれに氣位が高いので友達や盟友と会つて気安く話し合う事がないので自身の善悪を検討する事がない、毎日毎晩の話しに参加する者は皆家来達ばかりなので大抵の事はごもつともと云う事以外は云わない。従つて少々の間違いは間違ひとも思わないので改める氣持ちもなく、そのままになる事が多いものである、これはつまり大身の損になる事である。およそ人の上に立つて部下の諫めを聞かずに国を失わなかつたとか家が断絶しなかつた例は古今とも無いと語つた。

佐渡守はこの事を覚えていたので、ある時子息の上野介に語り聞かせて家康公を思い出し落涙した。上野介は、その書付はどんな文言でしたか、又その人は誰ですかと聞いたが佐渡守は、その書付の文言もその書き主も其方が知つたところで何の役にも立たない事だと云つた。

註1 この挿話は岩淵夜話だけである。佐渡守は家康股肱の家臣だったが
元和二年（1616）家康死後、間もなく他界

岩淵夜話別集第四卷完

岩淵夜話別集第五卷

- 第五五話 鷹狩の目的
- 第五六話 雷を避けるには
- 第五七話 仏法の咄
- 第五八話 安倍川の水を引く
- 第五九話 火事を出した老婆
- 第六十話 駕籠は独りで担がぬ
- 第六一話 人材は宝の中の宝
- 第六二話 親子の話
- 第六三話 池田家の忠義の家来
- 第六四話 小出大隅守の事
- 第六五話 虚飾を叱る
- 第六六話 仇に恩で報いる
- 第六七話 指節のこぶ

第五十五話 鷹狩の目的

ある時駿府で家康公が泊掛けの鷹狩に行く事になり、準備万端を本多上野介が承った。その時上野介はお伺いを立て、今迄狩場に連れて行かれる女中方は乗掛馬でお供されるように指示されて居ますが、今は天下一統で静謐ですから今後は駕籠でお連れされるべきと思いますと申上げた。

家康公はそれを聞き、確かに其方が云う様に武士は大身小身ともにその時々的身分相応に働く事が大切である、そうは云っても小身の時は全てを控えめにする事が作法であるといつても中には重く丁寧にして良い事もありこれを体裁という。又大身の場合は体裁を全て重く丁寧にする事が作法であるが、全く軽く控えめにする事もある、

一般に物事の作法は人々の位や身分によって大体決まるものであるが、時と場所によって体裁は替るものであると心得るのが良いぞ、何事でも同じ様に考えるのはよくない。すなわち大名が狩をするのはただ鳥獣を取ると云うだけではない、武士は大身小身ともに変事の役人であり、世の中が平和な時だからといって楽をしていると手足も弱り、いざという時に役立たないので常に心身を鍛えておく事が良いぞ、だからと云ってむやみに野山を駆巡るわけにも行かないので、鳥狩や鹿狩等の名目で平常は駕籠の乗る身では馬に乗り、自身で鳥を鷹に取らせ、鹿を狙う時は歩行で山坂を登り川を渡り、その上家中の者達の働きを見届ける、是も又大将の心掛であり嗜の一つである。

それだけでなく家中の者達は皆が歩行で供を勤めるので体も健康になり、力も付いて自然に山野の歩行に馴れ、いざという時の心得になる事も多い、従って大名が狩場へ出かけるのは軍陣の訓練と心得るのが良い、但し軍中へは

女を連れて行かないが、狩の場合は慰みも兼ねているので側に仕える女を多少連れて行くが、普段駕籠に乗るものは馬に乗り、馬上の武士は歩行で供に連れるのが適切である。其方などは全ての事について此心得がなくてはならないので十分心得る様にと有った。

註1 乗り掛け 江戸時代に宿場の旅客や荷物の輸送で馬一匹に廿貫目の荷物を載せ、其上に人独りが乗った

註2 本多上野介 家康が最も信頼した家老、本多佐渡守の息男。家康が大御所として駿府に滞在する様になると、江戸城の秀忠に佐渡守を付け、上野介を研修の為自身の手元に置いた。

第五十六話 雷に対する用心の話

或時駿府の御城で夏の空が急に曇り雨が烈しく雷も頻りに鳴っている時、御前で伽衆が集まり話をしていた。

その時家康公は、万事に用心しないで良い事は無い、地震などは急に來るものであるが家を丈夫に作るのか、或いは又家の近くに避難所等を用意して置けば難を避ける事もできる。ところがこの雷だけは何処に落ちるかも分らず、その上真直ぐに落ちるとは限らず斜めに落ちる事もある様なので対応の方法が無い、そうは云っても雷に対しても用心の方法はあるが皆分るか、と尋ねた。伽衆は誰もが、唯今の上意の様に雷だけは用心の方法が無いと思ひますと申上げた。

家康公は、実は用心の方法があるので皆に教えよう、例えば身分が高く居宅も広く部屋数がある所に居住する者は勿論、どんなに小さな家に居住する者でも今日の様に強く雷の鳴る時は、夫婦、兄弟があちら此方に離れて居る様にするのが大切な用心である。理由は親、子、兄、弟でも各自の運命で当人だけが雷に打たれるのは仕方の無い事である。この用心をしない者は雷雨の烈しい時に限って家中の者が一箇所に集まり、寄せ框をしているのは馬鹿げた事である、

人が多く集っている所へ雷が遠慮して落ちないわけも無く、もしその中に落ちれば一家全滅となる事は明らかである。前に京都の町人が雷が鳴ると狭い座敷に家内全員が閉じ籠り、戸や障子を閉めて火を燈して香を焚いていた。そこへ雷が落ちて死人が多数出て生き残った者も大部分は片輪となり、天罰に当たったのかそれとも前世の因縁か等と評判になった。これは天罰でも無ければ因果でもなく単なる愚か者と云うべきものであると語った。

註1 ヨセガマチ 寄せ框 商家などの入口の敷居、昼間取り外し夜戸を閉めるときに取り付ける

註2 この挿話は駿河土産にも見える

第五十七話 仏法の話

駿府に在城の時、江戸のある浄土寺の和尚が訪問し在府の間折々夜話にお城に登った。ある夜家康公が仏道の細かい点について質問すると和尚が答えたのは、仏法は元來釈迦如來の一法のみでしたが、時と共に八宗から十宗と分かれ、その宗派毎に夫々の教義や勤め方も御座います。従つて元來は釈迦の一法だからと云つてあれこれと色々宗派を渡り歩けば、雑学とか雑門などと云つてどの宗派としても良くない様になります、ましてや念仏宗などはその最たるもので御座いますと申上げた。

家康公はそれを聞くと、なるほどその様なものか、全ての道の学問も諸芸を修める一筋に思入れて修行しなければ大成する事は難しいという道理である、しかし死後の願の形には大身と小身の者により替るはずである。理由は自分一人だけが救われるだけの目的で死後を願う者は自分の氣に入った宗旨に頼り、他の宗旨には見向きせずとも用が足るものである。しかし既に天下國家を治めるものにとつては自分だけ成仏する様な事としては大身の義理が立たない。願わくば天下万民が全て成仏できるようにという願をしなければならぬ。天下の民の宗旨が八宗とか十宗と有るならば、諸宗共に氣を遣わずに皆を洩らさず導く様にする、これが天下國家を治める者の願というものであると上意があつた。例の和尚は何もあれこれ云わずにごもつともので御座いますと云つた。この和尚の名前や寺の名などは失念してしまつたので記さないとある人の覺書にあつた。

第五十八話 阿部川から泉水を引く

駿府の城内の泉水へ阿部川の水を引こうとの御意があつた。奉行衆が水道を設計して標識を立てて置いたものを家康公が鷹狩の時に自身で検分したところ、その水筋に小寺があり、寺の敷地内を掘割り水を通す様に標識がたつていた。これは家康公の考へに合わず、寺を潰して水を引くのであればその必要なしとした。御側衆の一人が、これは御用地として扱外に代わりの土地を与え寺を移させましようと申上げた。家康公はそれを聞くと、用地と云うのは目的に依るものである、泉水へ水を引などと云う事は単に慰み事であり私事である、家康一人の目を悦ばすために古來の寺を動かしてはならない、寺を避けて水を引くなら引いて良いと上意が有つたと云う。

第五十九話 火事を出した老婆

駿府で鷹狩に出かけた時、道端で年老いた女が一人幼い子供の手を

引いて泣いていた。家康公はこれを見ると、あれは何者で何故泣いているのか急いで尋ねよと指示した。

御供衆が立寄って理由を尋ねたところ老婆が言うには、私は向こうに見える村の者です、昨夜早く誤って火事を出して家を焼いてしまいました。ここを治めるお代官様から火の元の不始末で火事を出した罪で夜の内に村を立ち退く様云われました、何方へ行く当ても無くこの様にしておりますと言うので其通り報告した。家康公はそれを聞き、その老婆の村の名を尋ねて管轄の代官所へ連れて行き以下申し伝えよ、誰も家を焼きたくて焼いたのではない、火事を出した者を他国へ行かせる決まりなら、家康も最近二度まで城より火をだしたが何処へも行かなかったと間違ひなく言い聞かせ、この老婆は幸いに私の目に留まり不憫に思うので元の様に家を作って与えるようにと付け加えよとの上意があったとの事。

第六十話 駕籠は独りで担がず

家康公が駿府に居た時、江戸の秀忠公からの御用の件で家中からある一人が遣わされた。その人は在府中に頻繁に御前へ呼ばれ、よろずの事を聞かれ以下上意があった。

其方は將軍の前へ出仕して諸事の用を気安く言い付けられると見える、だからこそ今度の用事にも其方が指名されたものであろう。貴賤ともに主人の気に入る様に奉公する事は中々できない事であるが喜ばしい事である。それだけに其方の心構えが大切である、今では近習から外様迄大身小身の大勢の侍達がいるが、將軍の恩を有りがたく思うか又恩を受けても恩とも思わす恨みや不満に思うかは其方等の心掛け一つである。この点はよくよく考えるべきである。

第一に主人の覚えが目出度ければ自分では気が付かなくとも自然と奢りの気持ができるのが古今の人情である。奢は徐々に付くものであるから自分では奢っている気がなくとも他人の目にははつきり見えるものであるぞ、奢が付くと怠る様になり、怠りから全ての悪事が起こると認識し、前々から用心をして主人に気に入られて親しくなれば成る程に益々慎み遠慮し、我儘をせぬ様に心掛け、傍輩と交りでも依枯鼻肩する事なく、ともかくその者の人柄、心構えを見届けて將軍の為を第一に考えて、熱心に奉公をすれば後々は幹部や奉行役人等にもなりそうな人物ならば、どんなに自分が気に入らなくても連れ歩き、目を懸けてやり奉公し易い様にするのが良いぞ、自分と仲の悪い者でもこの様に考えれば外の者に付いては云うまでない。

第二は自分一人が目立って、万事の用向を他人に扱わせず一人で事を取り仕切り解決したがるのは、これも又主人に覚え目出度い者の大きな

欠陥である。その様な心構えの者はどんなに才知が勝れていても当座の解決は出来るかも知れないが何の役にも立たない器量である。

理由は乗物に乗って行く際に、力も背格好も揃った六尺が前後二人で担ぎ、その外に添肩と云って前後を担ぐ者に手を添え力を貸し、更に替肩として幾人も前後に立添ってこそ険しい道や長旅も安心して駕籠に乗る事が出来るものであるから、どんなに力が強くとも乗物を一人では担ぐ事はできない、もし担いだとしても乗る方は安心できないし、脇から見ても危なっかしい。

この様に天下国家を保つと云う事はたいへんな重荷であり、重荷を独りで持つて持ち損ずるのは問題と思ひ、臣下という大切な相談相手を幾人も撰び、それに官禄を与えて、その者達が力を合わせてこそ国家をも保つ事ができる。それを他人を交えずに自分独りだけが主人の相手に成ろうと思ふのはたいへん悪い考えである。乗物の前後に適切な六尺が多く付けばどんな山坂でも濼いで遠くへも旅が出来る様に、天下国家を治めるにも有能な家老達が多く寄集つて、且つ正しく奉行諸役人を撰び任命し、何事も率直に相談や評定をしながら政治を行えば、天下は平和に幾世も続く筈である。

国家の正道に必要な宝は人間以外には無いのである。だからこそ異国、本朝を問わず良臣とか忠臣として名を知られた者達は、自分の功を立てずに仲間の中から賢良の者を撰び、幾人も勸めて主人に役立つ様にしているのではないか、この事を良く良く心得て江戸へ帰ったら同役達へ詳しく語り聞かせよと上意があつたと云う。

第六十一話 人材は宝の中の宝

家康公はある時、旗本役人の空きがあるので後任者を任命しようと思ひ、土井大炊頭を呼んで、何某について人柄はどんな者かと尋ねた。大炊頭は承つて、その者は通常私の方へ気安く出入しておりませんので、どの様な人柄の者かはつきりとは存じ上げませんと答えた。

家康公が機嫌悪く語つた事は以下の通りである。多くの旗本の諸侍を洩れなくその人柄を知ることが私にも無理である、又同僚の善悪を知らなくても済む役の者に質問して知らなかつたとしてもそれは止むを得ない。この者は大勢の旗本の中でもそれ程人に知られていない程の身分の者でもない、まして其方は家中の者の善悪を常に見たり聞いたりしてこれを胸に収めて置き、私が尋ねた時にはそれを答える筈の役人であれば、どんな事でも知らないで済むものではない、其方がその様な心構えと知らずに、若いのが有能な者と見て家老の一角に指名して私の代弁をさせる様にした事は全くの眼鏡違いだつたと思うぞ。

この事は十分考えて見るべし、一般に武道に長じて自信のある侍は、家老筆頭等にむやみにへつらったり追従などせのものであるから、其方に限らず家老等の所へ出入をせぬ者達の中に有能な者が居る筈である。

その様な者が埋もれぬ様に気を付け、心に懸けて尋ねて来る様にする事が主人の為を思う家老筆頭というものである。道楽の道具か脇指の類で名物や名作がどれほど蔵の隅も埋もれていると聞けば、間違いなく熱心に探し出し私に見せて悦ばそう思うだろう、しかし器物はどんな名品であつても必要な時には役立たない、宝の中の宝とは人が全てであるから、常に口癖の様に云っているのにそれをぼんやり聞き流しているから、今の様な訳もない返答をするのだ、其方等の所へ朝夕出入りして親しくなり、気心を知られた者ばかりが役に付き、出世すると思つたと旗本の諸侍の心構えが悪くなり、諂い、追従のみに熱心になり全てが軽薄者になるであらう。およそ人間は元気が衰えて死ぬ様に、大名の家中でも諸侍が恥を知り義を守る様な家は元気であるが、諸侍の心汚くなり恥を知らず鼻は曲つても息さえ出ればと思つ様になつては主の恩をも恩と思わず、物事を其場凌ぎで辻褃を合わせるだけになり、諸士の心構えも悪く規則も乱れ、その家の破滅も直ぐにやつてくるものである。以後必ず肝に銘じよと上意があつたと云う。

註1 土井大炊頭(利勝1573-1644)家康・秀忠側近、1610年秀忠付老中

家光時代を通じて老中首座、大老

第六十二話 親子の話

家康公が駿府の在城の時、秀忠公が江戸より訪問した事があり、もてなしをして投頭巾の茶入を進呈した。其夜に御伽衆の人々より、今日秀忠公へ大切な宝物のお道具を進呈なされましたが、秀忠公も非常に有難く思つて居られ私共にもその旨ありましたと申上げたところ家康公は、それでは皆も秀忠にねだり投頭巾の茶の湯に招待されよと大變御機嫌で次の話があつた。

人が子を欲しいと云うのは少しでも早く家督を渡してその子の働きを見届け、自分は安心して老後を過ごし、この世を終りたいが為である。然し家督を渡すと云う事はその子の器量や年配にもより、又その時の様子によつて考えるべきである。家財や道具などはどうせ譲り与えるものであるから家督相続の前でも徐々に与え喜ばせるのも良い、自分の身ひとつとなり引退する事が本意と思つ親もあり、これを世間では何と潔い事と誉める事もある。又自分の秘蔵の道具等は身から放さずに隠居し、家督を継いだ子に与えて喜ばせる親もあるがこれも悪くはない。

細かくは私も若い時から見聞きする中で、常々たいへん仲の良い親子でも隠居して家督を渡して後不和となる事も多い、親子の事であるから本来互いの

心には気を遣わないものであるが、人は年を取ると成人した子供を頼りなく思い、つい我俣を云うのと老衰した親を朝な夕なに大切にしない子供の態度から始まって、他人の目には不和と見えるものである。その様な事を避けるには隠居する年寄の持つている道具を少しづつ機会を見て子供に譲り与えれば他人には疑われない、是も又我が子を悪く言われない様にとの親の気持ちより起こるのであると上意があり、御前に伺公する面々は御尤の事ですと感心した。更に次の上意があった。

人によつては隠居をした後、家督を継がせた子と真実に仲が悪くて様々の非難をして迷惑を懸け、隠居に不似合いな派手事を好み道楽して浪費して、それを家督を継いだ子に処理させ、その子の勤めも出来ない様にしてしまう者達が身分の上下共によくある事である。

もつともその子自身の問題による事もあるが、第一は親の不手際である、理由は古人も言っている様に、子を知る者はその父に勝る者は無いとあるが、親として我子の善悪を見抜けない事は大きな怠慢である。

自分の怠慢でその子の器量も見届けず家督を渡したのであれば、どんな犠牲を払っても親として手段・工夫を考え、何としても家を無事に維持する様にすべきである。従つて士農工商共に家を継がせる子の器量を十分に見極めて家を護る事は先祖に対する孝行の道でもある。

特に国郡の主となる者は我が子がどんなに可愛いからとても、諸民の上に立つべき器量でない者に無理に家督を譲れば、後々気まま・我俣を尽くし、誤った支配をする事は間違ひなく、その場合家中の侍達を初め領内の町人や百姓達迄苦勞させ困難に陥れる事になり、是は大身の意地では無い。

たとえ長男に生まれたからと言つてその子の器量を見極めない限り無理押しを避け、他の者を一門の中から選び家督を継ぐよう定める事は当然であり、ここに迷いを生じないのが大身の者の意地であるぞとの上意であった。

註1 投げ頭巾の茶入れ 室町時代の茶人、僧侶の村田珠光（1423-1502）が
一目見て感激して被っている頭巾を投げたという名器の茶入れ

第六十三話 池田家忠義の侍

大坂冬の陣前に片桐市正は秀頼郷の側を離れ、摂州茨木の居城へ引籠り家康公の味方となった。その頃堺の港に居た柴山小兵衛は大坂に近く、しかも近辺には話し合う味方もなく苦勞していた。片桐は関東の味方に参加する験（しるし）に柴山の急難を見て見ぬ振りには出来ないと思ひ、手勢の内少々を分けて摂津の国海道を尼ヶ崎まで行き、そこから船で南北の岸へ押渡つて柴山を同道して帰る様に指示した。

片桐の家来達はこの指示に基づき急いで尼ヶ崎へ駆け下つたが、早くも堺の浦へ

大坂方の手勢がいるとの風聞があった。此小勢で渡るのは無理ではないかと集まって評議していた。そこへ大野修理の手勢が大坂より来て尼ヶ崎近辺の野武士を集めて一揆を起こしたので、片桐の兵士達は苦戦し尼ヶ崎の城中へ使いを送り、加勢を出すか又は我々を暫く城中へ入れて戴くかいずれかの協力を頼んだ。城主は建部三十郎と云い未だ幼少だったので、松平武蔵守方から家来の池田越前、宮城筑後、南部越後等の武功の者達に人数を添えて後見としてこの城に置いていた。

此者達が集まって相談した結果、加勢を出す事も城中へ入れる事も出来ない旨の返答をした。片桐の人数は仕方がなく、この上は少しでも茨木の方を目指してと退却したが一揆は益々大きくなり、それに大坂勢も次第に加わったので、伊丹近辺で片桐の家来達は残らず討死をした。その時世間の評判でも尼ヶ崎城中の者の不屈なやり方は前代未聞である、池田家からの加勢の者達なのに今度の始末は不可解である、何となく主の武蔵守は大坂方へ内通しているのではないかと家康公へ武蔵守を悪し様に申上げた人もあった。

随って冬の陣和睦の後、二条の御城でこの尼ヶ崎の一件に付き調査があり、武蔵守の家来の中から伴大膳と云う者が出てきた。御前へ呼出され直に尼ヶ崎の経緯を尋ねられると大膳が謹んで言上した事は、尼ヶ崎は大坂に程近い所であり、その上西国への交通の要地ですから大坂方が攻取りたいであろうと思いました。そのため何時軍勢を向けて来るか分りませんので、昼夜共に遠見張番をだして城中では大いに用心しておりました。そこへ片桐の手勢と称する者が城外へやって来て彼是云っている内に大坂勢も来るし、更にその地で一揆等が起りました。城中ではこれは只事ではないと覚悟しました。

もつとも市正については大坂を離れて味方に成られたとの情報は聞いて居りましたが、確実な事は知り様もなく、その上市正は余人とは違いい大坂方の随一の仁でも御座いますので如何様の深い謀事もあるかも知れぬと疑っております。

然しながら城の人数が多ければ外に出る事もありますが、小勢の内から加勢の部隊を編成して城外へ繰り出せば、近辺の葭原の中に軍勢を伏せて置き突然湧起り城へ攻め込む事もあり得るので、外へ加勢に出る事も難しく、また前述の様な疑いもあるので小勢で籠る城内に茨木勢を呼入れて応接し万一城を取られたとなれば第一に内府様への不忠、次には池田家の恥なると城中の者達相談を究めて、片桐の者達の希望に添わなかったものとすと
言上した。

家康公はたいへんな立腹で、今になってとやかく言っても眼前で味方が

討たれても放置せよと、普段から家来に言っている武蔵野守の根性は一体どんな積りなのかと、そのまま座を立つのを見て大膳は左手で脇差を抜き後ろへ投げ捨て御前へ這いより小袖の裾にすぎり、これはお情けのない上意で御座います、いくらお姫様のお腹から生まれたのでは無くとも武蔵守の事はお孫さんと思われませんか、今申し分を聞いて戴けず、いつ聞いて戴けるのでしょうかと涙を流して申上げた。

家康公もそれを聞くと、よしよし聞分けてやるぞ、早く帰って武蔵守にも此旨を報告して安心させよと上意があったので大膳も手を合わせて御礼を申上げ御前を立った。

その後で家康公は座に付いて御前伺公の人々に言った事は、あの大膳の親も大膳と云って、その頃三左衛門が庄三郎と云う若輩だった時、馬の口取りをした中間上りである。以前長久手合戦の時親の勝入、兄の庄九郎父子が討死したと聞いて、両人が討れた場所へ庄三郎も乗り付けようとするのを、馬の口にすぎり引き返し連れて退く時、庄三郎が腹を立て、放せ放せ、と云って鐙の鼻で大膳の頭を続けて二三町の間蹴りつけたが、顔に血が流れ出るのも少しも構わず庄三郎を連れて退いた。後に三左衛門が播州一国の主となったのも彼の大膳の働きがあつてこそである。その者の子であるだけに今の大膳も主の為には身を構わず愛いヤツと思うぞ、現在家康の前へ出て今の様に云う者は外には知らない、武蔵守は良い人を持つとの上意だった。

註1 長久手合戦 小牧・長久手の戦い 秀吉対織田信雄を支援した家康の戦の時、池田輝政の父、兄が秀吉側で討死、

註2 三左衛門 池田輝政 (1565-1613) の別名、父・兄の死後家督を継ぐが関が原戦では家康に付き播州一国五十二万石を得る

註3 武蔵守 池田家二代目、輝政の正室の子池田利隆 (1584-1616) 通称武蔵守、輝政の継室が家康の娘督姫

註4 この挿話は落穂集にも見える

第六十四話 小出大隈守の事

慶長廿年 (1615) 五月七日大坂夏の陣で徳川方勝利の時、大坂城中より煙が出ると同時に大きく燃上がるのを家康公は茶白山の陣場より眺め、旗本の人々もこれを見て戦も完了したと悦んだ。

その時家康公は小出大隈守に来る様にと云い大隈守が御前に畏まって出たところ、あれを見よと上意があった。大隈守は大坂の方を一目見て、これはたいへん気の毒な事で御座いますと挨拶を申上げた。近所に居合わせた人々が、これは失礼な答え方であると思ったが家康公はこれを聞き、確かに其方は特別に秀頼と関係があったのでその様に思うのももつともであるとの上意で、その後家老達へも大隈守について語り感心したと云う。

註1 小出大隅守 (三尹 1589 - 1642) 小出秀正 (秀吉の武将) の四男、小出家
家督相続、秀頼にも仕えた

第六十五話 虚飾を叱る

家康公は若い頃から召仕う近習の侍達について、少々行届かない事があっても細かい事は云わず、多少の云い間違ひなどは咎める事もなかったので、たいへん奉公はし易かった。然しながら少しでも人の道に外れる事や辻褃の合わない事に関してはいへん立腹して苦々しく叱る事も度々あったと云う。

これについて大坂夏の陣勝利後二条の御城での事である。大坂城中に居た三宿勘兵衛の事を、関東にいた頃良く知っていると云う同国の侍が旗本に居たので呼び出してお尋ねがあった。ところが三宿の事は申上げずに下総国の高野台合戦での活躍の話をして、自分の名が上がる様に申上げた。家康公は暫く考えて、其方が云う永禄年間の高野台合戦当時は北条氏康が五十歳内外、子息の氏政が廿六・七歳ばかりの時である、その合戦の時は其方四・五歳の時であろう、辻褃の合わない事を言う者よ、そこを出て行けと云った時の顔色は二目と見られない程怒って居た。

その後上意でも、あの様な虚飾を云う者が一人でも家中にあれば全ての旗本の風俗まで悪くなる恐れがある、更に懲罰を云いつけるとの上意であった。ところが非常に忙しい時期であり、処分が延引している内に翌年の四月に他界され、結局懲罰はなかったと安藤帯刀の物語である。

註1 高野台合戦 国府台の字が通常当てられる、永禄七年 (1562年)

小田原北条氏康・氏政と安房・上総を制する土豪、里見一族との
国府台 (市川付近) における戦い、北条方勝利

註2 安藤帯刀 (直次 1555 - 1635) 幼少から家康に仕え、幕府老中

1610年に家康の命で紀州徳川頼宣の付家老

第六十六話 仇を報いるに恩を以てする

大坂夏の陣後駿府の御城でお咄の人々がある夜御前に集まっている時に、家康公が語った事は、私は皆も知ってい居る様に戦国時代最中に生まれ、若い頃から合戦の評議に明け暮れ心身をすり減らし、学問をする事も無かったので文には疎い、然しながら只一條の文を聞覚え、是を常に心に忘れず、三河国岡崎に在城していた昔より天下一統の今日に至るまで、この一條の道理に随って当家創業の功を立てた。さてこの一條とは聖賢の教えや仏典の中で何であると思うか、其方達考えて見よと。

その時御前に伺公していた人々で学問ある面々が、これではございませんか、あれでは御座いませんかと色々申上げたが、それは違ふ、それも違ふとの

事で人々は、もう分りませんと申上げた。家康公が云われたのは、今皆が云ったものは全て四書五経の中にある聖賢の詞と思うが勿論それは人の道に大切な事である、しかし私は文に疎いのでその様な事はしつかりと聞いた事はない、しかし「仇を報いるに恩を以てす」という一條は若い時から聞覚えて常に心に忘れず、大事にも小事にも役に立つ事が多かった、それ故大切にきた詞であるが今日皆に伝えるぞとあった。

註1 仇を恩で報いる 恨むべき人にかえって情けをかける（広辞苑）

第六十七話 家康公右手指のこぶ

家康公の右手の指節には四本ともにこぶが出来ており、年を取ってから更に固くなり直ぐに指が伸びないのを駿府城に居た小姓衆の者が気付いたが理由が分らなかった。

年輩の人々の話すのを聞けば、家康公は若い頃から戦の度毎に始めの内は采配で指揮していたが緊迫してくると、掛れ、掛れと云って拳で鞍の前縁を叩くので指の節より血が流出した。帰陣して治療をするが、傷が未だ癒えない内に又次の戦があり、前述の様になるので傷口が破れ、痛くてもその時は少しも意識しないので、あのような指形になったのだと語るのを聞き、皆不審が晴れたと云う。

大坂夏の陣まで家康公一生の間に、大小の合戦に逢ったのは四十八度とか伺っている。尚、更に考えるべきである。

註1 第五巻の各挿話は家康が大御所として慶長十二（1607）から死去

（1616）迄駿府に在城した時の講話が中心であり、註で述べた

以外は岩淵夜話だけに見える

岩淵夜話別集完



慶長九年頃の家康像
(久能山博物館蔵)